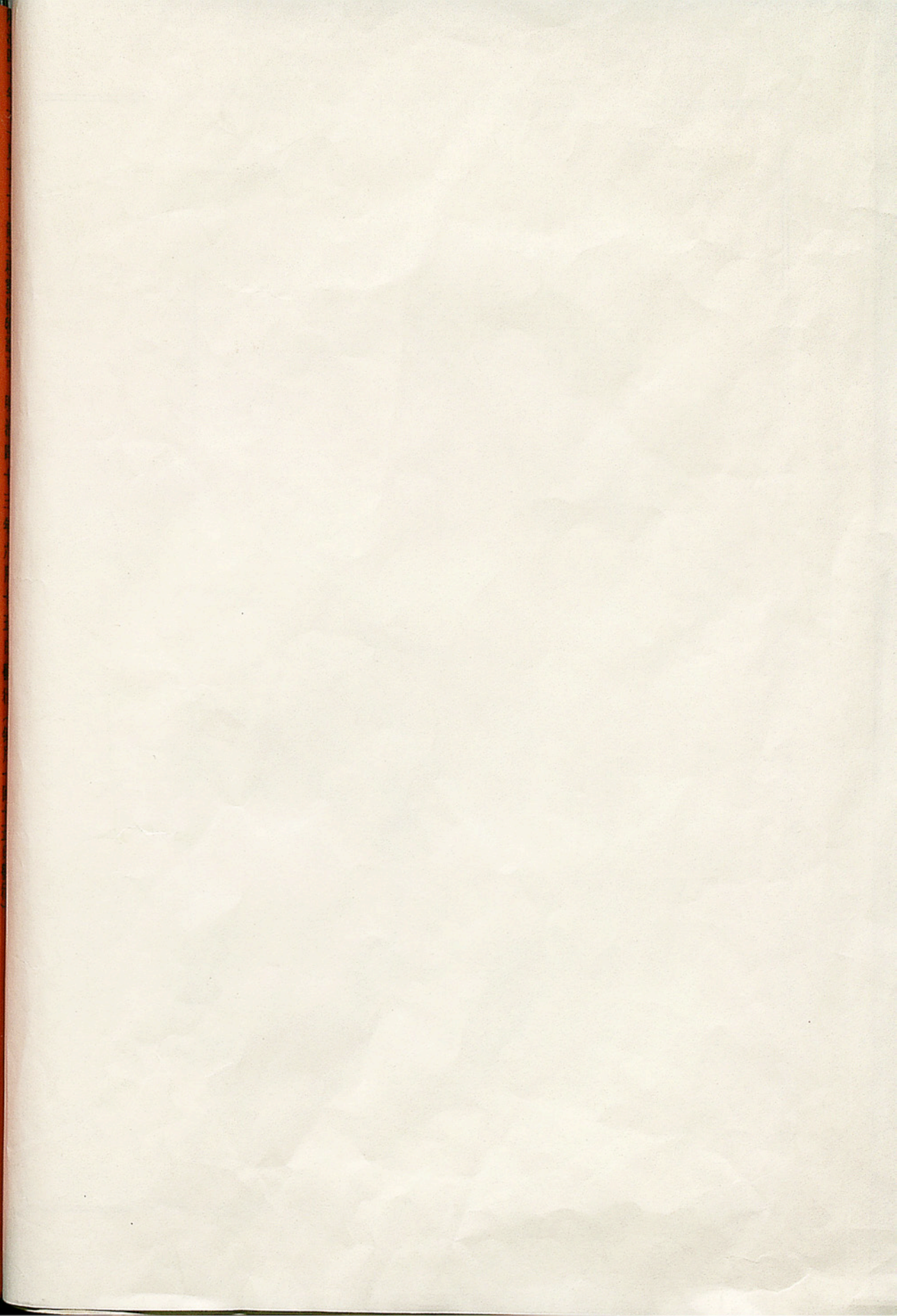


求道

第七卷
第五號



求道第七卷第五號目次

求道

◎誓願の親心

講話

◎業と恵

聖傳

◎チャータカ釋尊傳

久遠劫の昔(承前)
告白

◎憂き事多きは吾身なり

◎極易行の念佛

◎眞宗と婦人

雜錄

近角常觀

渡邊萬吉

逸名氏

近角常觀

◎唯念佛

時報

近角常觀

◎傳道日乗◎爾後の傳道日割

◎夏期に於ける青年の修養

近角常觀

講

話

夏期中休講

求道學舍

第二求道會

第三求道會

但シ七月二十四日求道學舍日曜講話ニ限

リ一回丈ケ開講、

求道

第七卷
第五號

誓願の親心

誓願のやるせなき御親心は如何なる不思議にてまします

ぞ、とても助かるべからざる我身をば特に助けたまはんとて
日夜待兼ねたまふ親心なり、必ず落つべき此身をば御身をか
けて落さじと呼びかけたまふ御聲なり、此待兼ねたまふ御や
るせなき御心をいたゞけよ、一往二往のことならず、五劫思惟
の御心をいたゞしめ、たてまつりしも、ひとへに我等が罪業深
重のためなりけり。我曾て親父の臨終に訣別告白して曰く、如
來様の御助け下さるのが難有う御座りますと、父應て曰く助
かられぬものと、一言胸に徹して我覺えず枕頭にあやまり
はてゝ曰く、嗚呼助かられぬものを、嗚呼助かられぬものを、
嗚呼助かられぬものを助けたまふ御親心にて在るか、御不思
議、御不思議、御親心を知り顔して申せしことの耻かしさよ、
助けて下さるのが難有いては親心が分つたてはない、助から
れぬ罪業深重の此身、物知り顔なる憐慢至極の我身をば、必ず

助け救はんとして、我不屈の項の折れるまで御心をば知らざす
は止まじと大悲の胸を傷ましめたまひし深廣の御親心にてま
しませしか、知れると思ふは知らぬなり、得たと思ふは得ぬの
なり、知らざては止まぬ御誓也、御身かけて必ずとゞけんと
の御眞實也、かゝるやるせなき彌陀の誓願不思議に助けられ
まゐらせて往生を遂ぐるの外なき也。

若く不生者のちかひゆへ、信樂まことときいたり、此やる
せなき御誓の弓の張りつめたる御力にて我等が胸中に眞心徹
到したる一念、實に是れ信樂開發の時刻到來したる也、夫れ以
みれば信樂を開發することは如來選擇の願心より發起すとは
洵に此やるせなき御親心によりて、遂に不孝不實の我身も初
めて大悲の御眞實をいたゞきたる有様なり、されば大聖矜哀
の善巧といふも釋尊を初めとして大聖の諸共に畢竟此
眞心を開闢せんとして善巧の手を下したまふ悲憫、矜哀の御實意
なり。この御眞實、御實意をいたゞかずんば願心を空しくす
るものなり、善巧も何の意味もなし、釋迦彌陀は慈悲の父母、
種々に善巧方便し、われらが無上の信心を、發起せしめたまひ
けり、眞心徹到するひとは、金剛信なりければ、三品の懺悔す
るひと、ひとしと宗師はのたまへり、我等は信心發起の一

念、真心徹到して、初めて大悲の胸をいたしめたまつり、待ちかねたまひし御親心に背きて、反對の方角に通れつゝありし身の罪惡を懺悔するの外なき也。

世の人、如來を信ずといふ、如來はかならずよくして下さるといふ、恰も病人が醫者を信じて醫者はかならずよくして下さるといふが如し、信ずるに違ひなけれども、何んとやらん信ずる心に我力をいれるにはあらざるか、随てよくして下さる結果を待設くる心地はあらざるか。然れども若し、醫者來りて、先一診して、直に先づ口を開きて曰く、汝の症狀はかく／＼ならん、汝はかく／＼の病に遇ひしことあるべし、かく／＼の心地するならん、かく／＼の傷あらん、苦あらん、と我語らざるに先ちて悉く之を知り盡して先意承問し、加之猶我未だ覺らざる個所までも指摘して最後に斷じて曰く、何れの藥も及び難し、何れの治療も施すに由なし、是死病也、難病也、唯我に特藥あり、我唯此藥によりて復活、再生したる實驗あり、之を與ふべしと。此時に至りて之を信ずるに力をいれるべきや、信ぜざらんと欲するも信ぜざるべからず、結果を豫想するの餘地ありや、結果の如何を顧るの餘裕なかるべし、親鸞にあきてはたゞ念佛して彌陀にたすけられまら

すべしとよき人のおほせをかうふりて信ずるほかに別の仔細なきなり、たとひ地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候、何れの行も及びがたき身なれば地獄は必定すみかぞかし、南無阿彌陀佛、々々々々々々。されば如來はかならずよくして下さると信ずるといふときは、未だかくの如く、とてもよくならざるものをよくせんとの御誓を聞かざればなり、否其御誓の下にとてもよくなれざる我身たるを自覺せざればなり。佛として慈悲ならざるはなく、光明ならざるはなし、阿彌陀佛は難度海を度せんとの弘誓なり、無明の闇を破るの無碍光なり、難度海中に渡船を得たり、豈其結果を云云するの餘裕あらん、無明闇中に此無碍光に遇ひたてまつる、豈疑の容るべき餘地あらん、敵の陣に火をとすを見て火にてはなきかと思ふことを得べけんや、世の所謂疑ながらの往生などは闇中火を想像假想したるの誤なり、よく／＼無明の闇を照らしたまふ盡十方無碍光に面したてまつるべし、大事のことなり、言に止らぬやういたぐべし。

惡しきものを見捨てたまはぬが誓願の大悲なり、惡しきことを爲さしめて助けんとするの親心にはあらず、親心としては一文の金をも盗むを見をなはして心を傷ましめたまふなり。し

かるに我等は其親心を傷ましめたてまつる惡業を爲すものなり、此に於てや大悲の親心は益々やるせなく、其大悲の御思召止みがたく、其爲すまじきを爲し、犯すまじきを犯すものに、此切々矜哀の親心を知らしめて其罪惡を自覺せしめ攝取の御手に收めんとて待ち兼ねたまふなり。此親心の子に達せざる限はかなしき哉未だ攝取の光明に入らざる也、たとひ親心ありとも子知らざる間は親心は水泡に歸しつゝある也、我等が親の御心をいたゞかざる一刻一刻は親の血涙を注がしめ親の肉身を削りつゝある身なるを知れ。此親の念力あればこそ此放逸懈怠の我身も眼を醒まし、此強剛難化の我身も大悲深重の矢に貫かるゝなり。惡しきは我等が罪業なり、さればそくばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ、故に此願力に遇ひたてまつればこそます／＼我等の罪業深重もおもひ知られ、親心を知らしめていたゞける後にも猶ます／＼我罪業の深きを慚愧するなれ、まことに／＼煩惱の強盛に候にこそとは我等娑婆の縁つくるまで相續する慚愧なりけり。

惡を爲さしめて助けたまふといふは眞面目の信念より出づる言にあらず、畢竟惡しきものでも助けたまふといふ横着心

の變形にすぎぬなり、これ警むべきなり。親の金を費し、親を心配せしめて、曰く、かく我に與る親の恩恵なりと、唯金を喜び費して、其金を作り與へし親心の血涙の結果たるを知らざるの言也、其親心をいたゞきて初めて一念發起の下に其罪惡を慚愧すべし、されど世の人其罪惡のものでも助けたまふといふ横着心を責むるを知りて、罪惡のものでも助けたまふなれどなるべく罪惡を犯さぬ様にせざるべからずといふ自力修養に陷るを警むるを知らず、横着心と、殊勝心と、畢竟大悲深重の親心を知らざる同じ根ざしより來れるを知らず、たとへば富者ありて貧者に向て曰く、我汝の借金を引受くべし、毫も心を勞する勿れといふ、貧者曰く彼人の親切感謝するに餘あり、彼人の親切と金力とを疑ふにあらず、されど我借金は實に多し、表面にあらはれたるもの彼の知る所なるべけれど我には隠せる借金あり、我之を暴露せんか、之を明言せば彼固より引受け呉ること疑なしと雖、そはあまりに恩寵に慣れたる仕打なりと躊躇悛巡、猶自ら其隠せる借金を辨ぜんとせば如何、此時に處する信仰の心持如何。若し我より打明けんと試むるも、とても／＼不可能也、若し富者一步進めて曰く、我汝の心を勞する所以を知る、汝の隠せる借金を我知

らずと思へるにや、心幼きことかな、我汝の借金を引受けんと
言ふ所以のものは、特に汝の隠せる借金に心を傷ましむるも
のあるを知れば也、汝の心を勞するはこれ／＼ならん、これ
／＼ならんと、佛かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とあほ
られたることなれば、他力の悲願はかくの如きのわれらがた
めなりけり。此に至りて人焉ぞ隠さんや、人焉んぞ隠さんや、
我等は此罪惡の底までも見透して助けたまはんとの大慈深重
の御親心に對しては我等の罪惡深重煩惱熾盛の心の底まで融
かされて、功德の寶海みち／＼て、煩惱の濁水へだてなし、
願力無窮にましますば、罪業深重もおもからず、佛智無邊に
ましますば、散亂放逸もすてられず、是實に本願力のやるせな
き親心に遇ひたてまつりて、遂に空しく過ぐる能はざる強緣
也。南無阿彌陀佛々々々々々々。



業
と
恵

《第二求道會士曜譚話》

近
角
常
觀

今日の題は『業と恵』であります。業といふは我々の惡業を言ひ、恵みといふは申す迄もなく如來大悲の恵みてあります。私共が如來の慈悲、といふ事に氣附かせて貰ふにつき、一應恵みである慈悲であるといふ事は、前に口にも言ひ言葉にも言うて居る事なるも、其如來の恵みは如何程尊い恵みであるかといふに、此惡業の罪深き私を哀み、此の惡業の私を捨てぬといふ廣大の思召である。茲を能く頂くのが何より肝腎であります。されば『救異鈔』の上にも親鸞聖人は、

彌陀の五劫思惟の願を案するに、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよ。と、斯く如く仰せられてある。我々は實に惡業の深い者である、茲へ氣を附けて頂く事が何より肝腎である。之を一口に言ふと甚だ手易き事のやうなるも、彌々茲に氣を付けさせて貰ふ事は實に難いので、兎角我々は自分の罪深き惡業の身なる事に氣が附かぬ。如來のお慈悲が尊いとは耳に聞きながら其の慈悲の尊きは斯く迄惡業を哀む慈悲であると氣が附かぬ。

蚊遣火 行誠上人
おのれこりおのりむせびて山賊がまし
ばいふせき宵の蚊遣火。
螢
まさりゆく光を見ればよひ／＼にあつ
めつべきは螢なりけり。
身をてらす光もあるを夏むしのなど闇
にのみまどひゆくらむ。
夏月
むすぶまにあけむとするか短夜の月の
いるさの山の非のみよ。
窓螢
この頃はおこたりがちの窓のとに昔ま
れびてとぶはたるかな。
氷室
なつの日をふそげになして氷室守あつ
きはおのが袂なるらん。
夕立
なる神の音羽の瀧つおとましぬゆふだ
ちすづし山しなのさと。
敬三老法師が駿河に歸ると
て一夜やどりけるにふめる
あまりにも叩きそ水鶏かどの戸を明く
れば歸る人もこそあれ。

此の如來のお慈悲に氣が附いて、自分々々の身の上は更に一點の取得も無く、惡業の塊りであると、茲の處を知らせて貰ふ事が何より肝要である。

其處で他力の恵みを頂く上に於て、自分は惡業の身である
と知る事が、軽い事のやうであるけれども、中々難いのである。
最も間違ひ易い場合を言ふと兎角多くの人が如來の恵みの
慈悲を頂く上に於て、自分は惡業の者であるが、其の惡業の
者でもかまはぬ、此者を助けるお慈悲であると、如來のお慈
悲を聞く一念に、我と我が心で自分が悪くてもよいのである
といふ心を起し、惡業々と口で言ひながら、自分が眞に惡
業の身であると頂く事が難いのである。茲をお互は能く氣を
つけて、自分が眞に惡業の身であると知らせて貰はねばなら
ぬ。此の惡業の私が何で安心するかといふに、自分は惡業の
淺間しき身なれども、唯私共の力となつて下さるは、此の惡
業の私を承知の上で、其の者を可哀想であると眺めて下さる
此のお慈悲一つで安心させて貰へるのである。此惡業の私が
惡業でもかまはぬ、惡業でもよいのであると、安心するので
は無い。此の淺間しき惡業の者が、如來の廣大なお慈悲まし
ませばこそ、安心がさせて貰へるのである。此の罪惡深重の
身が、如來の遣る頼無き恩寵、慈愛を蒙る身であると氣附か
せて貰ひ、自分の惡を自分で何う斯うせねばならぬといふ心
配が無くなり、お慈悲の一つで安心させて貰ふのである。此
のお慈悲の力強き所が何より頂き處である。

大層話が六かしくなりますが、解りよく申しますと、普通人間一般の考から言ふと、申す迄も無く人間は善はせねばな

らぬ、惡は止めねばならぬ。之は理屈離れて誰でも心に在る考である。何うかして善い事を爲度い、惡い事を止め度いといふのが人間の普通持つ考である。處が何うかといふに、人間は其の善い事が出来ず、惡が止められぬ。人間の問題は是れだけの事である。話が横に入りしたが、道を求めて多くの方が諸方面より私共へ聴きに來て下さる中には、専ら信仰を得度い、安心を決定し度いといふ心で來て下さる人がある。成る程信仰上より言へば最も善い事なれども、先づ我々が斯の如き人生上に於ける自分自身の心の問題を第二にして唯信仰を得度い、安心を得度いと言ふた處で安心が出来るものでは無い。信仰に氣の附く大もとは何かと言ふに、何も特殊の事が有るでは無く、我々日常の心の苦みを眼前に引き出して、善をせねばならぬ、惡を止めねばならぬ、人には親切をせねばならぬ、此の善惡の考が此の世に在る上には有るが、夫が其通り實際にはする事が出来ぬ。其處を何うしたら安心が出来るか、といふのが信仰に入る問題である。之が當面の問題である。其處を離れると間違つて來るのである。

先日來信仰を求めてお出下さる方々が、如何なる事を言はれるかといふに、或人は從來他力の書を讀んで、信心安心とか、頼む、自力を捨てるなどいふ事を多く聞き、其の心持が何うであるかなど、心に専門の信心決定の問題を攫まへて聞く人がある。又或人は自分の學びたる哲學、理屈の學問の上から如何に佛陀を考へてよいか、如何に絶対に味はうてよいかと、此の類の問題を驕してお出下さる人がある。一々考へると皆な最もなるも、其のやうな特殊の問題を心にこしら

へ、絶対に何うであるの、佛陀が何うであるの、信心が何うの廻向が何うのと言つて居ると、肝腎の信仰の問題が第二の遊戲問題に移つて仕舞ふのである。自分の心の其儘を打出して安心しようと思ふならぬ。

してみれば今言ふ如く、つまり我々は善い事をせねばならぬ惡はしてならぬと言ひつゝ、實際に於ては夫れが出来無いと、此事柄が信仰問題の結局である。も一つ言ふならば、南無阿彌陀佛の謂れを開き開くといふは、其の道理理屈を考へる事で無い。人生日常の日暮し實際其の儘を持出して、善はせねばならぬ惡は避けなければならぬが、實際に於て夫れが出来無い。人生此の善惡の問題のみでは無いやうであるが、一番心を悩ますは茲である。或は身體の病氣、或は事業の成否等の問題で種々の人生問題は起つて來るが、結局に來るともろ／＼の事柄より最後は疑ひの心起り、如何にしても善くなれぬ、善い事が出来ぬと、之が人間の結局である。

さて此の心に向いて如來の廣大な恵みが居て下さる。此の惡を聞く一つで此の問題が安心出来る、といふ事が他力の信仰では無い。聞く可き處は何かといふに、其の善い事は出来ず、惡は避けられぬ我々に向つて、如來の廣大な恵み召した一つを聞く事によりて此の心に安心が來る、といふ茲一つが聞き處である。

然らば其佛の私に向つての仰せはいかに。聞く可き處は茲である。先づ段々に申しますが、先程も申すが如く、最も間違ひ易き頂きやうは何かといふに、佛は惡くてもかまはぬとあ

るのぢやから、惡くてもよいのであると、此の聞きやうである

一應は之でも安心が出来るやうではあるが、矢張りそふいふ下から妄念が止まぬ、疑ひの心が起つて來る。それだから疑ひあつてもかまはぬ、惡くてもよい、かまはぬぞ、といふのが佛の廣大な恵みである、斯ういふ風に聞き易い。之れぢやと一應は自分の心中で、善が出来ずともよい、惡が避けられずともかまはぬと聞いて、一應はあゝ有難いといふ一念が起つて來るようではあるが、所謂真心徹到といふ眞の安心は得られ無い。何故ならば、善が出来ずともよい、惡が止められずともよいと聞いて、心の思ひが止むかといふに、日夜十二時中矢張り此の思ひは詰めてある。少時も止むものではないのである。矢張り惡は止め度い、善をし度いと思つて居る佛は出来ずとも夫てよい、惡が止められなくてもかまはぬと、一應は樂になつた心持はするけれども、矢張り心の底には「とは言ふものゝ善をするに如くは無い惡を止めるに越した事は無い」といふ思ひが止まぬ。結局安心は出来ぬのである。

其處で私の話し度いのは、茲の處が開きどこが間違ふと中々眞の處が開けぬといふ事である。

之を世間の上で言ふならば、親が子供に向ひ、自分の子供が間違つた事をなし、惡い事をする。子供が惡い事を爲る時に親として自分の子供が惡い事をしてよいと言つて放つて置く親は無いのである。親の慈悲より見ると、子供が一分一厘間違ひでもすると、身を切り裂くやうに苦しい。自分の子供が少しでも惡に近づけば、親はひやく／＼して居る。子供が間違ひをしてよい、惡い事してもよいなどといふ親の有る筈

は無いのである。去りながら親の大悲の心は何うであるか。夫は無論、言ふ迄も無く親は善い事した方がよいのである。間違はぬ事した方がよいのである。去りながら我々、其の親の心に從ひ、親の仰せの如く、惡い事を止め、善い事をする事が出来るか何うか。我々親から言はれぬ迄も、此事は能く承知して居るのであるから、夫が出来るか、といふに出来ぬ。親の恵みといふ事は、此の間から起つて來るのである。惡い事をしてよい、かまはぬ、疑ひながらてもよい、といふのなら、恵みの起つて來る事は無いのである。

斯くの如く親は色々必配下されあるが、我々小供は其の親の言ふ事をきき、善をなし惡を避け、善人の如く出来るかといふに、思ひ通りの行ひは一つも出来ぬ。人の満足する事何か一つ出来るかといふに、出来る事は一つも無い。斯く一方にはすべき道あつて、自分は夫が出来ずといふ茲が氣を附く可き處である。親よりいふと、一文の金でも惡く使つて、夫れてよいといふ親の有る可き筈は無い。如來の教えは惡くてもよいのであるなど、そんな事もある可き筈が無いのである。

然るに其の者を親の眼より御覽下さる時は何うであるか。其の仕てならぬ惡を爲し、近きてならぬ道に近づき、思つてならぬ事を日夜思つて居る我々である。斯くなる時親は如何に言ふか。貴様の如き過ばかりして居る者は捨てる、見捨てると言ふのであるか。茲に親心の有難味はあるのである。初めに申した惡くてもよい、かまはぬといふのが親の仰せてあるとするならば、親の慈悲といふ事は何處に在るか。如來廣大の

慈悲といふ事は、何處から出て来るか。

二

斯く爲す可き善は爲さず、止む可き惡は止めず、日夜三毒の煩惱ばかり起し、罪ばかり作りて居る我々である。其の者を如來より見て、其のすまじき事を爲し、思ふまじき事を思ひ、言ふまじき事を言うて居る我々を御覽下さる親心は如何にあるかといふに、即ち先程申した『歎異鈔』の御言葉である。「そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ云云。」即ち其の業のある罪深き、惡の止まらぬ奴を見て、さて「可哀想である、いつ迄も光りに氣のつかぬ、善くなる事の無い奴である」と見て下さる親心、之が本願の根本である。

一體信仰の上では、悪い者を助ける彌陀の本願である、さまり文句に仕て仕舞うて居る。悪い事してもよいといふ事であるといふと、成程一應は有難いやうであるけれども、其言葉の上では慈悲といふ事は何か分らぬ事になつて仕舞うて居る、遂には悪い事するのにも慈悲ぢや、といふやうな事になつて仕舞うのである。如來のお慈悲は、此の罪の深い者が可哀想である、無明の奴が哀れてある、何うかして其の者を導き助けてやり度い、といふ、此の親心の遣る瀬無き思ひ之が如來の大悲である。此の大悲が太もとなつて姿を顯はし下されたが、本願より現はれ下された盡十方無碍光如來のお姿である。

如來のお慈悲はお慈悲に變はりはなけれども、唯一應の恵

み、光明、智慧であるといふやうに、唯普通の我々に向ひての佛の情けであると思ふと、超世無上の本願、阿彌陀佛の大慈大悲といふ事は分らぬ。佛として慈悲ならぬ佛は無く、智慧ならぬ佛、光明ならぬ佛は無き故に、此の人間を哀れと思ひ、此者を救うてやり度いといふ思ひを以て向つて居て下さる事は、一切諸佛皆な同様である。然るに殊に阿彌陀佛の本願を「罪惡深重煩惱熾盛の衆生を助けんが爲めの願にてまします」といふは何故であるか。『和讃』に

超世無上に攝取し、

選擇五劫思惟して、

光明壽命の誓願を、

大悲の本としたまへり。

超世無上の攝取、五劫思惟の御苦勞といふ事は、何から來るかといふに、此の私がよく、いつ迄も恵みに氣のつかぬ奴である故に、五劫永劫の御苦勞があるのである。五劫永劫といふ事を斯く私初め知つた顔に言うて居るが、此の五劫永劫といふ事が、中々人間の考へられる如き小さな事で無い、如來不思議の遣る瀬無き親心の塊りである。之を頂くは如何にも如來廣大の御不思議であるといふ、唯此の一言の下に頂くのであるが、之が中々人間の言葉にかゝる如き小さな事柄で無い。所謂不可稱不可說不可思議である。其の遣る瀬無き親心から、此の罪深き善は爲さず、惡の止められぬ此者を助けんと、姿を現はし下されて、歸命盡十方無碍光如來である。此の罪深き惡業の者を救ふといふ、茲一つの御恵みである。

其處で他力信仰の上から申しますに、斯くいふ私初め御慈悲に氣の附く前當り前に考へた時は、五劫の思惟、永劫の修行、法藏菩薩の發願、正覺の誓ひ、斯ういふ言葉が中々分か

り難かつた。夫よりも恵み、慈悲と言ふ方が、余程分かりよさかの如く考へて居たのである。處が却て此の分かり難きと思つて居たお言葉、御教化が、御慈悲に氣のつく上からは最も有難き御教化であつたのである。慈悲と言へば、佛は皆な慈悲である。恵みと言へば、佛は皆な恵みである。今特に阿彌陀佛の慈悲、阿彌陀佛の親心といふ。如何なる廣大の親心かといふに、中々一通りの事では無い。唯一應の可哀想では無いのである。我々は一通りの事では救はる可き人間ぢや無い。一通りの事で助る可き人間ぢや無い。一通りの事で助る位なら、親は夫程の心配はして下さらぬ。一通りならざる私、當り前ならざる私である。暗みの中に一點の明るみも無き私、間違つた方向に行く私である。行けば行く程、迷ひに入る私、罪惡深重煩惱熾盛、常に没し常に流轉せる私である。其の者に向ひ、其の罪深き事を能く知り、能く承知の上で、其の者を哀み、其の事の爲めに日夜心配して下さる。其の親心の心配の塊りが、五劫の思惟、永劫の御修業である。親の仰せに背き親に逆げ廻はる私、其の子供を助ける爲めに親が種々に心を碎いて下さる其の親の御心配の塊りが、五劫永劫の御苦勞である。其の救うて遣り度いといふ親の御念力の塊り、之れが本願である。「設我得佛、十方衆生、若不生者、不取正覺」親と名のつく上は、此の親の心を衆生に知らせぬ中は、親であるとの名乗りは揚げまい、といふ此のお心である。其のお心から張り切る心の弓を張り、此の心を衆生に届けよう、と、廣大の親心を此方に差し向けて下さる。其の親の願力、之が正覺の御誓ひである。

夫故、届いて下さる如來の願力は、唯可哀い、位の事では無い。親には背き、罪ばかり作りて居る此の迷ひの人間、此の苦む自分の子供等に、親と名のつき、親と名乗りを揚げるからは、此の親の心を知らせ、此方に振り向かせて、此の親の心を届けずには措かぬといふ、此の遣る瀬無き親心の塊りの御本願である。「設ひ我佛を得んに、十方の衆生至心信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せん。若し生れずは正覺を取らじ。」其の親心の届いて下さる一念には、あゝ嬉しやと親に向ひて喜びの念佛が浮ぶ。之が唯一聲の念佛でもあゝ有難いと、親の心が分かりて出る念佛ならば、十念の念佛である。斯くして此の一念に、此の我が親心を届け、親の側に引き寄せ佛の所に連れ來らずば、我も親とは名乗るまい。佛とは言ふまい。といふ此の御心である。言ひ換ふれば自分が佛とあるからは。斯くして衆生を救はずば措かぬといふ、此のお心である。之が本願の親心である。

我々の業といふ事は、之で頂けるのである。如來の本願は斯く我々に業のあるを承知であ起し下された御本願である。否承知位ではまだ言葉が足らぬ。如來のお慈悲は我々の業に眼の届く位の事では無い。我々に此の業のあるのが、抑々佛の心を痛めさせられた大もとである。恵みのもとは、此の業がもとになりて顯はれ下されたのである。『歎異鈔』には宣はく、彌陀の本願には老少善惡のひとをえられず、たゞ信心を要とすとしるべし。そのゆゑは罪惡深重煩惱熾盛の衆生、をたすけんがための願にてまします。云々。

又先程より言ふ如く「そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」である。此の業のある奴を助けんといふ、此の如來の遣る瀬無き思ひが慈悲のものである。

さて我々善の出来ぬ人間、惡の避けられぬ人間である。夫れかと言つて善を爲いてもよいと、腹はすはらず、惡止められいてもよいと、安心はつかぬ。して見る處へ、其の汝を哀む爲めの親であるぞ、其の業のある汝を助ける爲めの慈悲であるぞ、此の思ひ一つで長々待ち受けて居る親であるぞ、此の親の仰せが心に届く時は、何う頂くのであるか。親が然う言つて下さるから、惡止められいてもよい、善出来なくてもかまはぬのであると、頂くのでは無い。夫ては善をせねばならぬ、惡は止めねばならぬと頂くのかといふに、然うても無い。此程の惡い者を親は夫れ程に待つて居て下されたのであるかと、其の親心一つを頂く。其の一念に「彌陀の五劫思惟の願を案ずるに、偏に親慈一人が爲なりけり、さればそくばくの業を……本願の忝けなさよ」である。今日迄善が出来ぬ、惡が止められぬと苦にして居たが善をせんならぬ、惡を止めんならぬと思つて居たは、大いなる我が身知らずであつた。其の何うしても善の出来ぬ惡の止められぬ此者を能く見通して、其の者を哀れと待ち受けて、下された親様であつたかと、此の親の慈悲の手が胸に届いて下された一念は、此方に於て外事は無い。「そくばくの業をもちける身にありけるを……本願の忝けなさよ」。一分一厘善出来ぬ惡の止められぬ此の私でふりますと、其の一念に凡ての出来ぬ此の者が

遣る瀬無き親の慈悲に照らされて惡みの中に救はれるのである。

三

猶ほ際とく申しますが、茲の處が實に肝腎である。今日多くの人は「惡い者ぢやけども慈悲で救はれる」と、此のけども一言で我れと我が惡を自分て消して居る。如來の救ひの言葉の下に、我が惡を自分て消して仕舞うて居る。之では慈悲が頂けたのでは無い。親の眞の親心は如何にあるかといふに、惡くてもかまはぬといふ仰せては無い。其の惡い奴が忘れられぬから、何うか親の處に歸つて呉れよ、其者に此の親の心を届け度い、といふ此の親心である。此の親の思ひが届いて下さる一念に、今迄惡いとは口に言ひつゝも、夫程惡いとは思へなんだ、夫程迄に親に心配かけて居たのであつたかと、我が身の惡業は何處で知れるかといふに、親の心配で我が身の惡しさの程が分かるのである。此の親の心配が無ければ、我が身に惡業がある、罪深き、何れの行も及ばぬ、などいふ思ひの起る筈は無けれども、此の親の心配、苦勞、親が夫程迄にして身を捨て姿を顯はして下された、親の親心で初めて氣が付き見れば、我は久しく親に心配かけた身である久しく親に血の涙流させた私でふりますと、惡くてもよいのであると、親の所に歸るのでは無い。夫程待たせて實に申譯が無いと、親の呼び聲で初めて自分の惡い事に氣がつき、罪惡深重の我が身なりけりと、初めて我が身の程の分つたのが、親心の届いて下された一念ある。故に『歎異鈔』には、

善導の、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流轉して、出離の緣あることなき身としれといふ金言にすこしもたがはせおはしませず。云

昔から茲は機の深信とて、喧ましくいふ處なれども少しも六かしい事では無い。あゝ我が身は實に惡い者であるといふ其上に言ふ事は無いのである。「惡いけども」とか、「惡るくても」などいふ事はいらぬ。罪惡深重、煩惱熾盛とは、實に我が身の事なりしと、彌々我が身の程の分つたのが「現に罪惡生死の凡夫……出離の緣あること無し」である。今日迄は左程にも思つて居なんだが、曠劫よりこのたか常に沈み常に流轉して、長い間罪を造り、憎む可らざるを憎み、怨む可らざるを怨み、出離の道を得る事出来なんだのであつたか。

三恒河沙の諸佛の、

出世のみもとにありしとき、

大菩提心おこせども、

自力かなはて流轉せり。

随分今迄善い事もし、發心も仕て見たけれども、皆な、

自力聖道の菩提心、

こゝろもことばもおよばれず

常没流轉の凡愚は、

いかでか發起せしむべき。

皆な駄目であつた。

聖道權化の方便に、

衆生ひさしくとまりて、

諸有に流轉の身とぞなる、

悲願の一乘歸命せよ。

あゝ今迄長い間迷ひ來り、「出離の緣ある事無し」、自分が出られる縁手懸り無く苦しんで來たのであるが、其の私を見捨て給はぬ佛のみ親に今日遇ふ事を得て、此の淺間しき者が慈悲悲一つで安す／＼引き揚げられ、佛のお側に行く事を得るは

一分一厘自分の力では無い、親心の爲めに此の私が引寄せられたのである。

餘り譬へを言うやうではありますが、我々が、慈悲に氣のつく一念、信仰の頂ける有様は何うかといふに、慈悲に氣附けば氣附く程、石の下に落つるが如く、益々自分の罪深き事が分かり、「何れの行も及び難き身なれば、地獄は一定すみかぞかし」、下に落つる石の如く、氣附けば氣づく程、地獄に墮ち込む私である。我々の心に思ひ、口に言ふ處は一として地獄行きの種ならざる處は無い。日夜罪惡深重の日暮を現に是れ爲しつゝある、罪惡生死の凡夫である。其の者が可哀想といふ如來の親心が、一通りの事て此の者が引き揚げられる筈は無けれども、抑々佛本願の親心が、其の罪惡の者が哀れなばかりにお起し下された御本願である。其の地獄行きの者が可哀想である、と手を延べて其の者を攫まう／＼として下さる。其の親心の届いて下さる一念、氣が附く一念である、其の一念に地獄奔りの私が、慈悲の一つで地獄へも墮ちずして極樂に行く。茲をうつかりすると、此の慈悲一つで助かる事がすつかり頂けぬ。「地獄行きでもよいのである」「罪深くともよいのである」「惡いけれども助かるのである」といふは、自分の心で自分は惡いけれどもと、自分て自分を浮かして仕舞うて居るのである。石は、いつ迄も石、鐵は永久に鐵である。其の沈む可き石、鐵が、何故地獄へ墮ちずして沈まずに居られるか、といふに遣る瀬無き慈悲一つに浮かせて貰ふのである。

願力無窮にましますば、

罪業深重ももからず、

罪の重く無いのが、重からずとも何でも無い。此の石鐵の罪重き身が、願力無窮にましますれば、罪業深重も重しとせずである。此の願力無窮の恵みなればこそこの罪惡深重の身が易す／＼と引き揚げられるのである。

佛智無邊にましますれば、散亂放逸もすてられず。

佛の慈悲極まり無き故に、散亂放逸の身も捨てられぬ。自分の身は永久に落ちる可き身、いつ考へて見ても取り除けの有り可き身では無く、徹頭徹尾淺間しき我が身である。然るに其私を可哀想である、其の罪の深い奴が哀れてある、其の罪業深重が我が涙のもとである、夫が佛の出て来る大もとである、此の廣大な御念力一つで、此の一分一厘善き心の起らぬ者が、お慈悲の海に浮かばせて貰ふのである。

猶ほ際どく申しますならば、此頃の道を求めて苦む人は色々々自分の心で煩悶し、我が身は罪惡深重にして、助かる縁手懸りが無いと思つて居る夫れ「故自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み常に流轉して出離の縁あること無し」といふ此の思ひは、お慈悲を頂く前にも有るのかといふに、然うて無い。お慈悲を頂く前には、自分が仕て見やうの無い身と迄は思へるが、到底助からぬ者ぢやと迄は思へぬ。右でもゆかず、左でもゆかず、地獄一定の我が身である出離の縁有ること無しであるとは知られぬ。茲が信仰の頂き處である。私共自分の心に覺えがあるが、信仰以前非常に苦みて、何れに道も無いとなりつゝも、矢張り何處か頼みに思つて居た。矢張り何うかしたら救はれようとの思ひがあつた。其の者が安心出来るは何故であるか。此方の方は其の横

着心のある我々である。其の者を親様の方は可哀想と言つて下さる。其及ぶまじき事を思つて居る奴が、可哀想ぢやと言つて下さるのである。私がお慈悲に氣のついた時の事を申すならば、私は自分程淺間しき仕て見やうなき人間は、人が相手にして呉れぬ。此の根性の曲がり果てた者を、誰も可哀想ぢやと言つて呉れる者は無いのであるかと、いつも最後は此の思ひかりして居た。夫が恵みに氣の附きた時は何うかといふに、あゝ之を知り抜いた上で、此者を可哀想ぢやと言つて下さるお慈悲であるかと、茲に氣が附き初めて安心を得たのである。

譬へて言ふならば、病人が今に死が来る、自分は助からぬ仕て見やうの無い者である、連も自分の助る道は無いと思つて醫者に見て貰ふ、初めは病氣が左程で無うても死ぬので無いか知らんと見て貰うた者が、最後は醫者があかぬと言つても何うかしたら助かるので無いかと思ふ。向ふが良いと言つても、いかぬのでないかと思ひ、悪いと言つても、良くなるので無いかと思ふ思ひがある。其如く我々は善出来ぬ、惡止められぬと言ひつゝも、何うかしたら出来るので無いかといふ思ひがある。處が醫者の方が病人の悪い所を先きに承知して斯る痛みがあるであらう、斯る苦しみがあるであらう、斯くもあらう斯う、もあらうと、此方の思ひを醫者の方より先き言ひ出して、げに然もあらう、夫故に此の病の治るやうに此の一幅の藥を用意して置いたから、之を飲めと渡される。斯く隅から隅まで知り抜いて渡されて見ると、如何にも外には治る見込の無き者であつたか、夫を知り抜いて此の者に與へる

爲めに御用意下されてあつた此の廣大の藥であつたか、此の私の身上を夫程迄に御承知下されてあつた醫者であつたかと、茲に氣の附く時は助かる助かるまいかは自分の力では無い。偏へに向ふの大悲に打任かせて、地獄に行かうと極樂に行かうと、仰せのまに／＼となるは、此の身の惡を知り抜いて其の者が哀れぢやと呼んで下さるお慈悲一つの力である、もとは病ひを抱えながら、病ひを病ひと知らなんだ此の私である。然るを汝は強健の積りて居るが、然うては無いぞ、立派な積りて居るが、夫が間違ひぢやぞ、汝の身には病ひがあるぞと、藥と共に容體を聞かせて下さる。其の一念に、實は今日迄病を持ちながら病ひを病ひと知らずに居た私であつたか、其の病人の私なりしかと、其の身が此の藥一服で安心し本復させて貰ふのである。如來のお慈悲は此方がして見様なくなりてから、頂きに出懸けるお慈悲では無い。此方は病ひある身を知らずに迷つて居るのである。夫を如來の方より先き御覽下されて、其の者を哀れと思召し、向ふて適當の藥をこしらへて、之を届ける爲めに長々の苦勞をして下さるのである。其の長々の御苦勞、善巧の御方便で、其の親心の届く一念、此の廣大の藥を頂く身の上として頂くのである。茲がお慈悲の有難い處である。如來廣大のお慈悲は、此の身に此の親心の藥を届けやうとの御心配である。頂く迄は自分は仕て見やうが無いと思ひつゝも、猶ほ得度い／＼と思つてた身が、如來親心の譯を聞き藥を頂けば、初めて何れの行も及び難き身と分かるのである。

四

大分話が堅くなつて來ましたが、猶ほ序に申しますと、又或人は信仰以前お慈悲に氣の附く迄は、種々思ひ詰め苦み詰める事のやうに思つて居る。之が又然うて無い。其時は仕方無しに思ひ詰め、苦み極まるが、まだ心の中には何うかしらばといふ思ひが止まず、種々惱んで居るのである。まだ本當に自分の仕て見やう無き事が分つたのでは無い。夫がいつ分かるかといふに、其の藥を頂く一念に、之ならずしては及ばぬ身であつたと、初めて分かつて貰へるのである。其の分かるが自分の力で分かるのでは無い。之ならずしては助ける事が出来無いと、此の一服の藥を御成就下された其の親心、之が届いて下さるにより、初めて我が身の間に合はぬ事が知らせて貰へるのである。

夫れ故、彌々お慈悲に氣が附くと、氣が附けば附く程益々我が身の罪が分かるのである。昔から茲の處が非常間違ひ易い。古來多くの人の中には、お慈悲に助けて頂いてからは、何時迄罪惡深重と言へよう、親鸞聖人も既に信の一念に

六趣四生の因亡し、果滅す。『信卷』と仰せられてある。又『和讃』には

金剛堅固の信心の、

さだまるときをまちえてぞ

彌陀の心光攝護して、

ながく生死をへだてける。

とある。罪などゝは信仰前には言うが、お慈悲に氣の附いてからはそんな事無いといふ人がある。間違ひである。お慈悲に氣が附けば附く程我が身の罪がよけ分かり、本願の秤に掛けられ、懸けらるゝ程、我が身の淺間しく罪重き事がよけ

分つて来るのである。茲が實に有難い。如來廣大の慈悲の深きは我が身の罪の深きに分り、吾が身の業の深きは、本願の深きに彌々分つて来るのである。

さて斯く頂く時は互は、信の一念に於て遣る瀬無き如來の慈悲を頂き、毎々言ふ如く、

彌陀の光明にてらされまいらするゆゑに、一念發起する時金剛の信心をたまはりぬれば、すでに定聚のくらゐにさめしめたまひて命終すれば、もろくの煩惱惡障を轉じて

往生忍をさとしめたまうなり。云々。(歎異鈔)
は、信の一念に此の世の生命は畢り、光明中に日暮する身と仕て頂くのである。去りながら遣る瀬無き光明中には日暮するが、其の日暮する私は矢張りもとの罪惡の者である。『行卷』に宣はく、

大悲の願船に乗じて光明の廣海に浮びぬれば、至徳の風靜に衆禍の波轉ず。即ち無明の闇を破し、速に無量光明土に到り、大般涅槃を證し、普賢の徳に遵ふ也。

今朝も文章書きつゝ氣が附いた事でありすが、我々は願船といふと、船の方に力を入れて大悲の本願の方を形容に見て仕舞ふ。船を主にして慈悲の方を形容に見て仕舞ふ癖がある、全くさかさまである。佛が此の罪深き者を助けて遣り度いといふ、此大悲の本願が此の罪深き私を浮けて下さる船でこそあれ、船の形容に大悲の本願があるのでは無い。若し此の大悲本願が、此の罪深き私を浮けて下さるにあらずんば、此の罪惡深重の私は、船に居ようが陸に居ようが、落ちるものに決まつて居る。其の落ちる者を落さぬぞと、其の如來の親

願海を頂けば、其のひろくとした海に今迄の煩惱の風、智

愚の波がなくなつて仕舞ふ。弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり。も、此の船に乗つた以上は、出かける先きは涼しき大悲の風任せ、船が何處に行かうと、方角は自分でつけるのでは無い。人生に居る中は、此の本願の船に乗つて暮させて貰ふのである。船に乗つたからとて自分の目方が軽くなるのでは無い。自分は矢張りもとの罪のからだである。汽車に乗つて、いくら中から扉を攫えて自身の身體を軽く仕やうとしたつて仕方が無い。重い者は矢張り重いのである。其の仕やうの無い者を哀れみまします廣大の恵みの爲めに、其の重い者が浮け上げられ、念々刻々廣大の慈悲の中に過させて貰ふのである。又『歎異鈔』には、

彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をばとぐるなりと信じて、念佛申さんとおもひ立つ心のある時、攝取不捨の利益にはあづけしめたまふなり。

此の廣大の如來本願の分かる一念が、彌陀の誓願不思議に助けられ参らせて、往生をは遂ぐるなりと信じた一念である。其の一念に念佛申さんと思ひ立つ心が起る。其の心の起る一念まだ口に念佛が顯はれずとも、はや既に攝取不捨の光明中の身として下さるのである。又

煩惱にまなこさへられて、攝取の光明みざれども、大悲ものうきことなくて、つねに吾が身をてらすなり。煩惱に眼さへられて居る私である。信心頂いたからとて煩惱が無くなるのでは無いが、如來の慈悲は其の煩惱の者といふ仰せ故「大悲ものうきことなくて、つねに我が身をてら

心て浮けて下さるからこそ、大悲の船である。我々は直ぐ船ぢやからもう樂だと思へども、此の罪深き者を助けて遣り度いといふ此の如來廣大の船なればこそ、此の罪惡深重の私が樂々と浮かばせて貰へるのである。其の罪深き私が此の廣大の願船に乗せて貰うて見れば、いつの間にやら今迄の煩惱の風波は止み、「至徳の風靜に衆禍の波轉ず」——今迄の惡業の波が、其の廣大の恵みの風の爲めに轉じかへられるのである。所謂轉惡成善の御利益である。今の『歎異鈔』の御文に、

「もろくの煩惱惡障を轉じて無生忍をさとしめたまうなり」とあるも茲である。遣る瀬無き如來大悲の親心の爲めに煩惱惡障が其儘轉じて、有り難き喜びの身とさせて貰ふのである。茲でこゝろと廓然大悟に氣附かせて貰ふのである。去りながら夫れならば慈悲を頂いてからは苦しみが無いといふに、矢張りもろく罪惡深重の衆生である。矢張り生死海に居る中は、煩惱の波も起り、愚癡の風も起るのである。けれども願力の船であるからは、夫が更に心配にならぬ。

『和讃』に

無明長夜の燈炬なり、智眼くらしとかなしむな、生死大海の船筏なり、罪障重しとなげかざれ。

罪の深き者が、罪の深きを救ぐて無い。其の淺間しき者を見捨てぬが親であるぞと、親様が重荷を茲に願力の船で浮けて下さる。

大願海のうちには、智愚の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり。

成る程此の世は生死の迷ひの海である。けれども慈悲の大

すなりである。

さて斯くなると、信の一念に念佛の力で、眞の佛弟子、妙好人、希有人、最勝人、として下さるのである。『和讃』に、信心よろこぶそのひとを、如來とひとしといたまふ、大信心は佛性なり、佛性すなはち如來なり。他力の信心うるひとを、うやまひおほきによりこせば、すなはちわが親友ぞと、教主世尊はほめたまふ。佛は其者を吾が親友である、如來と等しと言つて下さる。又

『觀經』には、念佛する者は、當に知るべし、是れ人中の分陀利華なり。觀世音菩薩、大勢至菩薩其の勝友と爲りたまふ。云々。

斯く仕合せの身として下さるのである。其の仕合せの身が、念佛まうしふらへども、踊躍歡喜のこゝろあるそかにさふらふこと、またいそぎ淨土へまいりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやうとまうしいれて候ひしかば、云々(歎異鈔)
である。此の仕合せの身に仕て頂いたのであるから、いつきり無しに念佛が出来るかといふに、出来ぬ。いつ迄経つても石は矢張り石、鐵は矢張り鐵である、石が玉になる事も無ければ、鐵が黄金になる事も無い。

大分話が専門的になりますけれども、此頃私の喜ばせて貰うて居る事を一つ申すならば、親鸞聖人が『信卷』の畢りに信の一念に前念命終後念即生で、無生忍の悟りに行き、眞の佛弟子となり、彌勒菩薩と等しき身に仕て貰ふと喜びあらせられたあとに、

誠に知んぬ。悲しい哉愚禿、愛欲の廣海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず。耻づ可し、傷む可し。

といふ言葉がある。あゝ此の親鸞は仕合せ者で、斯る尊き身に仕て貰うた。其の身でありながら、「愛欲の廣海に沈没し名利の大山に迷惑して、定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近くことを快まず。」本願の船に乗せて頂たいからは、何時着くかは願船まかせてはあるが、着く可き時節来れば、着く先きは安樂淨土、生命畢れば淨土の彼岸に行ける事に決まつて居る。――茲の處を聖人は又、

眞に知んぬ。彌勒大士は等覺の金剛心を窮むるが故に、龍華三會の曉、無上覺位を極むべし。念佛の衆生は横超の金剛心を窮むるが故に、臨終一念の夕大般涅槃を證す。

彌勒菩薩は五十六億七千萬歳の後に佛に成られる。我々如來本願の恵に遇ひ、本願の船に乗せて貰うた身の上は、好む事では無けぬども、業とあれば仕方が無い、いつ如何なる病氣にあひ、病惱苦惱せめて死ぬるとも「臨終一念の夕大般涅槃を證す。」其の廣大の身分にして頂き、安樂淨土に生れるに決つた身にして頂きて居ながら、定聚の數に入る事を喜ばず眞證の證に近く事を快まず、耻づ可し。傷む可し、と言ひてさて夫れより阿闍世王が罪に陥り非常に苦悶して光明に接せられた例の阿闍世王入信の文が引いてある。茲である。

之は見ようによつて色々に頂く事が出来よう。が私自身にすれば『懺悔録』に書いて置いた如く、阿闍世王、入信の有様を直ぐ私の氣のついた時に引き當て、喜ばせて貰うて居た。

て貰ふといふ、茲が有難いのである、其の菩薩同様にして頂いた身が阿闍世王同様の淺間しき心を起す、實に慚愧の極である。其の淺間しき阿闍世王同様の身が又菩薩同様の仕合せな身にして貰ふのである。實に感謝と慚愧である。阿闍世王が信仰に氣の附く時菩薩が慚愧といふ事を言はれた。如何にも之は最もなれども慚愧は信仰に氣の附く時ばかりにあるのでは無い。お慈悲を頂いた後も「定聚の數に入ることを喜ばず、眞證の證に近く事を快まず、耻づ可し傷む可し」の慚愧の思ひで日暮させて貰ふのである。其の阿闍世王が信仰に入つた時、諸の佛弟子が偈を以て讃歎した。其の中の一句に、

如來一切の爲に、常に慈父母と作りたまへり。當に知るべし、諸の衆生は、皆是れ如來の子なり。

如來は常に私の爲めに慈父母となつて下さる。世尊大慈悲、衆の爲めに苦行を修したまふこと、人の鬼魅に著られて、狂亂所爲多きが如し。

如來が此の罪惡の私の爲めに苦勞して下さる事は、親が不孝者の爲めに種々心配して、恰も鬼魅に著かれて狂ひ廻はると同様に心配する。夫れど同様に佛は此の私の爲めに苦勞して下さるといふのである。此の文を私は『懺悔録』の序文中に引いて置いた事であつたが、親鸞聖人は『御本書』の中に引用なされてある。殊に聖人は此の文に氣を附けられたらしく、先日京都に参り、色々な御眞筆を拜見した中に、南無不可思議光如來の名號の下に、此の文をお認めなされてあるを拜見し大に喜ばせて貰うた事であつたが、此頃又御縁ありて、聖人が釋の善蓮へお與へなされた御文の寫しを拜見した。夫に色

言ひ換へれば阿闍世王とは私の事、王舍城の出来事は私の身の上と喜ばせて貰うて居たのである。之は親鸞聖人も『教行信證』の序文に

淨邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、淨業機彰れて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり。

と、阿闍世王の事を『教行信證』の一番まつばじめにお書きなされて、此の罪惡の私が此の如來本願の廣大な恵みを頂く事の出来るのは、阿闍世王逆害の御恩と示し下されてある。又『信卷』序文には、

夫れ以れば信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起し、眞心を開闢することは、大聖於哀の善巧より顯彰せり。

大聖於哀の善巧と示し下されたが、釋尊はじめ、阿闍世王韋提等の諸の方々の御方便で今此の私にお慈悲を屈けて下さるとお知らせ下されたのである。處で從來私は之を信の一念に言うて居たのであるが、親鸞聖人は、其の信を頂き、淨土に往く身と定まり、定聚の數に入りながら、眞證の證に近く事を喜ばぬ、耻づ可し傷むべしといふ茲に、此の文を引いてお出になるのである。私の言ひ度いのは茲である。之は何うかといふに如何にも信の一念に阿闍世王同様の私が如來廣大のお慈悲を頂くのであるが、彌々頂いた上も矢張り五逆十惡の阿闍世王同様の身であるぞと、頂いた上での喜びに示し下されたのである。私は茲を言ひ度いのである。昔は阿闍世王同様の身であつたのが、今は救はれて菩薩同様の身になつたといふのでは無い。阿闍世王同様の私が、菩薩同様の身にし

々の願文等を引かれてある中に、此の御文を引かれてあるを拜見して、一入如來の遣る瀬無きお慈悲を喜ばせて貰ふた事である。佛が此の惡業の者を救ふとの御苦勞は、人の親の子の爲めに狂するが如し。如來の本願、超世無上といふ事も、茲であると喜ばせて貰ふた事である。即ち今日は、此の惡業の者を見捨てぬとある茲が恵みのもとである事を話したのであります。(六月十一日)

師あるとき「五濁惡世の我等こそ、金剛の信心ばかりにて永く生死をすてはてし、自然の淨土に至るなれの和讃について誦話せられし折に申された。

草葉の露にも月は宿る、只頼む水一つが肝要である、されば無始よりこのかた我等が苦惱の婆娑を離るゝによしなく、迷ひ來りし凡夫、これ皆眞實心のなき故也。うつかりとして此度も空しくする。只信を得よ。さあ信が大事、扱て此心を拵らへて、假に眉をしばめ涙を流してこれこそ眞の信心、金剛心なりと思ふ是等三業精進の修行とて尤もよろしかるべきことなれど何ほど作りても凡夫の行は虚假なり難離なり無始よりこのかた清淨眞實もなき故に迷ひ來りし身が今更の殊勝願は皆虚假也、其ては不可なり。とても參られぬ三毒、妄念の中ならなりとも只頼めばあなたの誠故にこそまいられる(惠空語録)

聖傳

ジャータカ釋尊傳

久遠劫の昔 (前號に續く)

菩薩ジバンカーラ佛及び大千世界の天使等が無量の證言もて讚美せるを言葉聞き思ふやう、佛言は世に誤なきものなり、佛の言葉は眞理に毫も違はず、恰かも空に投げし土塊が落下する如く、又生物に死の到來する如く、又曉に日出で夕に日没する如く、又獅子が洞穴を出るや大吼する如く、又婦女の子を産む如し。此等は總て必然の事なり、如此佛陀の言は確實にして過缺なし、故に我は佛たるべし。と

佛と天人の言葉さ、
歡喜、愛樂思へらく
佛のみことに疑惑なし、
勝者の言に虚妄なし、
誠に我は佛たらん。
空に投げたる土は落つ、
大慈の佛の御言葉は
必然にして永久ぞ、
盛者必滅まぬまれず、
榮あふるゝ佛言は
必然にして永久ぞ。

日の昇るごと入るがごと
榮光の佛のみことばは
誠實にして永久ぞ。
洞を出てし獅子王は
必らず大吼するがごと、
光あふるゝ佛言は
必然にして永久ぞ。
婦女が子を生む如くにて
榮あふるゝ佛言は
必然にして永久ぞ。
如此確信したる時彼は如何なる事を修すれば佛陀たるべくやを吟味し觀察したり。十方四維上下あらゆる事物の上につきて之を追求したりしに、遂に布施の第一果こそは佛種なれと觀じぬ。こは諸佛の過去にふみ給ひし第一の道にして、スメダ亦此道を修せざるへからずと決心したり、心に告ぐる様、賢者スメダよ、爾今以後汝は布施の行を遂げざるべからず、恰かも水瓶に満てる水をくつがへさば何物も残らず、又覆水は再び瓶にかへす能はざるが如し。如此若し汝富貴、名譽、妻子及び大小の財産を顧みず、人々の求むるが儘に之を與へて遂に一物をも残さず、さらば汝は菩提樹下に端座して佛陀となるべし、とて布施の第一果を得んと堅くも決心したり。故に曰くわれ佛種をばたづねまし、
十方四維上下等
萬物あらん限りをば
さがし求めて布施をえぬ。

此道こそは先哲等
たどりてつとめ給ひけれ。
汝堅くも進めかし
佛たらんと勉むるは
布施の功德にしくぞなき。
漲ぎる水瓶覆し
覆水もとに入れがたし、
大小わかず乞ふがま、
施しはてゝおしまざれ。
なほ進みておもへらく此外に佛陀たるべきなほ多くの道ぞあらん、と追求せしに、又道德の果こそ第二の道なれと觀じぬ。曰く賢者スメダよ、此日以後は正義の果を得ざるべからず、恰かもヤツク牛が彼の命にかへて彼の尾を守る如く、汝佛陀たらんには命をかへりみず正義を守らざるべからずとて、第二の道德の果を得べく決定したり。

汝佛果を得んとせば
道はなほ數多からん、
第二の道は正義なり。
先の佛陀も此道を、
つとめてたどりたまひにき。
汝堅固に進めかし、
例へば牛が尾先をば
物にからめし時をみよ、
命にかへて守るらん。
汝命捨つるとも

道義を堅く守るべし。
此等のみにても未だ佛陀たるべきには遠からんとて、彼は追求し、遂に克己こそ第三の佛種なれと觀じぬ。賢者スメダよ、汝は爾今以後克己の第三果を修むべし、牢獄に永くとらわれし人其獄を厭ひて寸時もとく之を脱離せんと欲するが如し、汝亦如此し、生死輪廻の牢獄にとらはれし自身を厭ひよく己に克ちて生死を脱離すべし。
これらの道は佛たるに
おほも少し、求むれば
克己の行は第三の
佛種のうべき道なるぞ。
先の諸佛も此道を、
たどりてつとめたまひにき。
幽閉されし人々は
牢を厭ひて寸時をも
争ひ出でんとするがごと
汝も廻輪の獄を出て
克己の行に面をむけ
佛陀たるべくはげめかし。
此等のみにても未だし、とて彼は一しほ深く觀念を礙して追求せしに、智慧の果こそは第四の佛種なれと認めぬ。曰く、賢者スメダよ、汝は今日より智慧を獲ざるべからず、汝はあらゆる賢者につき知らざる所を問ひ正すべし、例へば托鉢せる僧が大小貧富の家を擇ばず托鉢して、疾く己が爲に食を集めん事をのみ欲するが如し、汝亦此如し、總ての賢人に近づき智

慧を得て佛種を獲得せよと堅く決定しぬ。

佛たらんにはこれらのみ

つとめて得べきものならず、

なほ觀すれば第四には

智慧の道こそ勉むべき。

先の諸佛もこの道を

たどりてつとめたまひにき。

たとへば托鉢する僧は

大小貧富のわからなく

食を求むむ如くなり、

汝も常に賢者等を

訪ひて知らぬを尋ねべし。

なほおもへらく此等のみにて佛果に達せんには程遠からんとて追求せしに遂に第五の道を見出しぬ。賢者スメダよ、汝は爾今以後精進してたゆまざれ、例へば獅子は獸の王なれば一々の舉動に於て些の隙なく努力奮進す、汝亦佛陀たらんは一舉手一投足遲延せずして努力精進せよ、さらば遂には佛たるべし。

これらにてなど及ぶべき、

佛たるには精進の

第五の道を主要なる。

先の諸佛も此道に

よりて佛果を得たまへり。

汝佛陀とならんには

つとめて精進修むべし、

獸の王とよぶ獅子は

ふるまひ寸時もたゆみなし、

汝精進つとめなば

遂には法の王たらん。

かくして彼は一しほ思を礙し、に、なほ第六の道を見出しぬ。そは忍辱にして諸佛のよく修したまひし處なり。曰く賢者スメダよ、汝は以後永き苦行に堪へざるべからず、汝は褻貶をもよく忍ぶべし、見よ大地は淨穢何れをとはず投げられしものに欲覺及び害覺を起さず、たゞよく此等總を受けて甘んぜり、汝亦如此し、若し汝褻貶に堪へなば遂には佛道を成ぜん、と第六の忍辱を修すべく深く決定したり。

これらのみかは、觀すれば

忍辱こそは第六に

先の諸佛のよく修し

よく守られし道ぞかし。

汝深くも決定し、

やがて佛果を證すべし、

大地にならへ、人々は

淨穢えらばず捨てんと、

地は欲覺も害覺も

起さず受けて甘ぜん。

汝褻貶共に受け

忍辱修してたゆまずば

やがて佛果を證すべし。

なほ思を馳てさま／＼に思惟觀察せしに第七に眞實の果を

見出しぬ。曰く賢者スメダよ、汝は眞實を行すべし、こは諸佛世尊の共に修したまひし處汝亦堅く修行せよ、例へば電光頭上に落ち來とも、汝ゆめ虚妄を爲すべからず、例へば行星ヅエナスは四季必ず彼女の軌道を巡廻して寸毫も違はず、己の便宜の爲に他道に迷はず、汝亦眞實を確守して名利の爲に惑はずんば、必ず佛果を得ん。

これらのみかは尋ねれば

なほ第七の果こそあれ。

眞實こそは先哲の

共にふまれし道ぞかし。

汝佛果を種えんには

此道をこそたどるべき。

空のウエチアが四季常に

軌道はずさずめぐると

汝も眞如の軌道をば

つゆたがはずにすゝめかし

さらば佛果を證すべし。

なほ思を礙して觀すれば此等のみにては佛果を證するに未だし。諸佛は如何なる道を経たまひしや、決定こそ第八の道なれ、汝爾後決定を修すべし、一度決定せし時は變ずべからず、大山十方に風起りてうたれるれど毫も動かさず、其位に座す、汝亦如此し、よく決定して動かざれば佛陀たるべしとて曰く

佛陀の位なほ遠し

求めて得たり、第八の

決定こそは先哲の

つとめたまひし道ぞかし。

大山風にうたれるれど

ゆるがず座する如くにて

汝佛果をえんとせば

決定をこそつとむべき。

又スメダおもひみれば他に善意の道あるを見出しぬ。賢者スメダよ、是亦諸佛によりて修せられし道にして汝亦今日より、修せざるべからず、例へば水は善惡の人をえらばずよく汚れを去りて冷を保つ如し、汝亦然り、佛果を證せんには善惡を撰ばず、善意もて對せざるべからず、とて深く善意を修せんと決心したり。

なほ求むれば第九には

善意の道を見出しぬ、

先の諸佛もことごとく

たどりてつとめたまひけり。

汝も佛陀たらんには

つとめて善意修せかし。

水は善惡わかちなく

人のけがれを清めつゝ

常に冷けくある如し。

汝も人のわからなく

善意もてみなむかひなば

やがて佛果を得らるべし。

なほ思を十方に馳せて求むるに遂に第十の寂靜を求めたり、諸佛の共に修せられし道に寂靜かくべからず、とて曰く

賢者スダグよ、汝佛陀たらんには此第十の寂靜亦主要なり、汝盛時にも又逆境にも同じき心をもて寂靜に過すべし、みよ大地は靜穢をえらはず、汝亦順逆共に淨寂たらざれば佛道を修し難しとて、彼は第十の果を堅くも決定しぬ。

これらの外に尋ねれば

寂靜こそは第十の

道にこそあれ、諸佛亦

共にたどりて努めにき。

汝寂靜に住しつゝ

堅固に心支へなば

勝れし佛果を得らるべし。

みよ大地には淨穢とも

受けて動亂せざるべし、

憎愛の心離るれば

常に寂靜に住すなり。

汝も喜悲に處する時

心みたれず自制せば

寂靜の果に達しつゝ

やがて佛となるぞかし。

時に彼おもへらく、此等は此世に佛陀となるべき唯一の道なり、諸菩薩によりて修行せられし佛種なり、此の十種の道をおきて他を觀するにはや何物も残るなし、此十種は天上天下四維、等を見るに一つも見出す能はず、唯我心に永く住するを見るのみと。

かくの如く善言を信じ心に收め、總てを深く決定して修す

べく堅くも思ひ定めぬ。初めより、終りより、繰り返しつゝ、心に握りて離さず、前後に置き、中間にあき、兩端に置き、

兩端より中間にとりて益々決定堅し。善言は四肢の犠牲なり、

小善言は財の犠牲なり、大善言は生命の犠牲なり、とて此等

をば善言小善言大善言等に分ち自在にもてなしぬ。其様は例

へば二所にもゆる油を一にし、或は「シネラ」の山を棒にして

「キヤツカヅハラ」の大洋を撈撈するが如し。如此再三、十の

善言を握り握る程に遂に彼の信の力により、四那由多八百千

リーグの廣さなる此世界は象に蹂躪さるゝ藁束の如く、又動

ける砂糖の工場の如く、大音聲を發し、陶器車又は油工場の

車の如くめぐりめぐりぬ。故に曰く、

これらはすべて此世にて

佛陀たるべき種ぞかし。

此他にはや道つきぬ、

汝これらをふみしめよ。

自利利他等の善言を

つかみつかみし其うちに

信の力は強きかな、

世界とどろきわたりつゝ、

車の如くめぐりぬ。



告白

憂き事多きは吾身なり

沼垂町にて 渡邊 萬吉

謹で一書を呈し申候。

大悲御照護の下益々御健勝にて御傳道被遊候段大慶至極に奉存候。

却説茲に先生に訴へざるを得ざる一事有之候。そは私の愚妻事昨年初夏より發病(肋膜炎)致し、三ヶ月以前に既に醫士に見放され、只今にては一日の生命保し難しと醫士は申居候實に本月の求道誌の御自督に

此の世は當てにならぬ……何時如何なる病でどの様になるかしれぬ……人間と云ふものはいよゝゝとなるときは唯如来様の御力ばかりと云ふことを知らせて頂くことが今更の様に感ぜられます……

との御言葉、誠に私も今更ながら實感させて頂き、感謝慚愧の至りに堪へず候まゝ、御繁忙なる御旅行さへ甚だ不遜ながら、亂筆を呈せし次第に候。恐惶々々。

私には二男一女(十才、五才、二才)あります、妻が昨年六月、悪しき病を發し、驚いて新潟市某博士に療養を乞ひ、今日まで入院やら種々手を盡くしましたが、中々快方に向ひません、其間に次男は急病にて之又母と共に入院する、其最中に他へ

里子(乳養のため)に預けある女兒が重き眼病にて既に一眼

を失するかと心配しました。幸に次男と女兒は佛天の御冥祐

にて全快しましたが、妻は依然として快方に傾かない、今年

は二月に入りて寒風烈しかりし爲め、病勢頓に進みました、

併し私は療養さへ怠らざれば、温くなり次第全癒するものと

信じて専心加養に盡くして居りました。然るに何ぞや四月一

日より病勢重なり、醫士は逆も全癒の見込みないと申た。嗚

呼萬事休せり。私は悵然悲しまざるを得ざるのである、三人

の愛兒を遺して逝く妻の心情は如何ばかりであらうと、殆ん

ど食事も咽喉を下らぬのである、人は皆な私に同情して小兒

の三人も遺されて後が困るならんと問ふてくれるが、自分は

寧ろ此の言ばを腹立たしく思ふのである。後の事などは

如何でも宜し、今現に愛兒を遺して逝く本人の心情を如何せ

んや、私はそれより外出しても他の同年位の婦人を見る事が

非常に厭である、なぜ彼れのみが不幸病床に呻吟して居る

かと思ふと、依然涙を止める事が出来ない、茲に其れに百倍し

たる一層の悲しみがあります、私は今日まで娑婆の事にのみ

追はれて、未だ妻に御慈悲を爲と語つた事のなかつた事です、

自分のみは自由に御寺詣りをさせて貰ひながら、妻は小兒の

世話などの爲めにろくろく參詣も出来なかつたです、今まで

求道誌に特に難有き箇所は後ちに家族に讀み聞かして共に嬉

ばんと、其都度一々點までつけてをいたのだ、夫れが今日迄既

に三四年未だ親しく語る機会がなかつた、否な機会があつて

も自分は語らなかつたのが之れ舉て自分の大なる罪である、

噫遲そかつた天を仰ひて長歎久しかつた、いやゝ遅くとも

是より寸時も逃さず大悲を説かねばならぬと決心しました、然るに此に又哀しき一事加はつて居る、則ち私は三月に既に職務上長岡市へ轉勤を命ぜられ、病家族をのこして一人、長岡へ轉勤しました、今は日夜病人の枕頭に看護して居る事が出来ない身である、實に氣が揉めてきました、則ち職務に寸暇を得れば直に走って病者の枕頭に來り、大慈大悲の御遺瀨なき親心を頂かして貰ふて喜んで居るだけを描べるのです、又手次き寺の淺平御住職も時々來りて大悲本願を傳へてくださるのであります、病人も日一日と喜んでくれるので私も非常に嬉しくて堪らぬ、晝日の煩悶がどこかへ去つて胸が大に開けてきた、併し猶ほ病人の未來が心配で、氣が焦めるので、時々職務を欠ひて來るのです、そして求道誌の昨年四月（本號は非常に有難ひので當時三部を追送して頂き同誌に分てり）御講話の『本願の眞意』及び本年三月號『廻向と慚愧』を最も難有繰返し讀み聞かせるのである、病人も誠に喜んで聴いてくれます、即ち

……如何なる悪人でもない、悪人なればこそである
……喜べいでもない、喜べ得ない奴なればこそであ
る

との懇切丁寧に説いてある點である、恰も吾が瀕死の病人の爲めに特に説ひてあるかの様であります、其後本月八日正午には危篤に瀕し、正に念佛と共に往生せんとしましたが、御冥祐によりて又蘇生しました、即ち當時走せ來りし博士に餘命如何を問へば、曰く、斯く衰弱しては何時と保する事が云へぬと、即ち今日の保證は出来ないものである、噫實には出来ないは人生である、人間は一度は皆な斯くなるのである、能く考

の點に至るや、妻は流涕鳴咽涙瀑をなす、自分は歔歔流涕殆んど次を讀む事出来なかつた、後とは唯互に念佛のみである、南無阿彌陀佛々々々々々々。

私も四月上旬頃の心裡にては正に發狂せんばかりでした
が、妻が非常に喜んでくれたので大に胸が開け、今日ではなん
だか一ツの樂みが自分にある様な心ちである、則ち自分の子
供でも善き所へ縁付けてもするかの様其日の來るを待つ如き
感があります、既に命を此世から奪ひし者が、稱名と共に今
日まで存命で居るとは、私自身も之か爲めに非常に喜ばして
費ふて居ります、之れ畢竟求道誌の大恩恵である事を深く佛
天に感謝するのであります。

私は或る彫刻師より観音様の御すかたを彫刻して貰ひました、背部に彌陀観音大勢至の和讃を刻りて貰ひ、勿體ないが妻がなきあとの形見となさんと思ふて、本月十日に二男を病母の枕頭に呼んで此の観音様は、母がなき後ちは母上と心得よと滂沱たる涙をおさへて申しますと、長男は僅にハイと答ひました、そして記念のために母子共四名にて、背の御和讃に朱を入れ、互に相見て流涕する事暫し。

私は四月二十七日に機關車進行しながらつく／＼自分の目下の悲境を思ふて、懋信尼公の御遺狀を深く味はして頂きました。

誠に凡夫の習なれば憂き事多く候べし
と、噫吾等凡夫の身である者、憂き事多きは當然である、憂き
事夫れ自身は人生であるが、然るに偶々堪へざるの憂き事に
遇ふや、煩悶なき能はずである、蓋し其の煩悶する下た心は

へて見れば吾々として實は今日を保し難い身であるが、然し醫士に既に斯く宣告しられた病人が傍に居るは誠に悲哀至極のものである、又實に淋しきものであります、其大病人の枕頭を離れて長岡へ歸る時の私の心情は腸寸斷の思ひてあります、則ち次に來るまで存命で居るや否やを自分も思へば、病人も思ふのである、私は別れに際して御念佛一つを忘れるなと云ふて決然別れるのです、只互に相見て涙を以て別れるのである、其後も常に職務を欠ひて來るのです、職務上甚だ不成蹟になるは、實に不本意なれど、又止むを得ません、亦本月二十二日に來りし時『廻向と慚愧』の御講話を讀んで、共に非常に喜ばして頂きました、則ち

……また淨土へいそぎまいりたき心のなくていさゝか所
 勞のこともあれば死なんずるやらんと心ほそくおぼゆるこ
 とも煩惱の所爲なり……苦惱の舊里はすてかたく……
 なごりおしくもおもへども婆娑の縁つきてちからなくして
 おはるときにかの土へはまいるべきなり、いそぎまいりた
 きこゝろなきものを殊にあはれみたまふなり

今現に一日の命保し難き病人に向て讀むのであるから、讀む自分も、聴く病人も、實に云ふに云はれぬ深き靈感に打たれるのです、次に段々と讀んで

若しは行若しは信一事として阿彌陀如來の清淨願心の廻向成就したまふ所に非ること有ることなし

貫ふ物と貫ふ心と共に佛より下されものである、
 さる品物のみならず、夫れを有難と受ける心まで
 廻向の御授けてあるとおしらせ下さるのである。
 親より御

『誠に凡夫の習なれば憂事多く候べし』と仰せある箇所だけを他人に譲り居る故である、何ぞ夫れ横着の甚しきや

かゝる身なればこそ、諸の佛にも見放され候ひしを、彌陀佛の救ひたまはんとて、此身一人の往生をかけものになされ、正覺ならせたまへば、如來の御姿こそ我等が往生の疑ひなき證にておはしまし候へば、必ずく御過ちあるましく候。

と、嗚呼此の金言他人に譲れぬなり、我一人頂戴せずんばお
らす、然らば愛さ事多きは我身なり、正覺御成就は我が爲
めなり、我れの愛さ事多きは我往生の疑ひなき證しか、ア、
感謝々々慚愧々々、此の時の喜しさとても自分の如き禿筆に
は記されません。

南無阿彌陀佛
南無阿彌陀佛

頓首敬白

一狗をやしなふは、盗人なまらしめんため、鶏をかふことはあかづきをわしらせんがためなり、もしぬすびをみてもほえざる狗、あかづきになれどなかりん鶏は、其やしなふに益なきものなり、淨土眞宗の行者といふは、信心を決定すへし、ただ其名ばかりをかりて信心ならんとは、その益なしとみえたり。

一火はものなごかし、水はものなぬらすといふことなれども
うたがふものあるべからず、されば彌陀をだにたのみたてまつ
れば御たすけ一定なりとうたがひなきを信心とまふすなり。

《真宗敕要鈔》

極易行の念佛

逸 名 氏

信心とは如來と私との關係であつて、殊に他力教の信心は如來よりの賜物ですから、これを我物顔に申す事は誠に申譯ない事であると私自身思つて居ります。それも傳道者ならば兎も角、自分の如きものは先づ控へて居たいと思つて居ましたところが、學舎より告白を書けとの御手紙ゆへ成可く御遠慮致したいと御答へ申したところ、それならば失名でもよいからとの御話ゆへ、それではと御請け致した譯です。

私は淨土眞宗の子弟であります。幼少の時から病身でしたから常に世の中の暗黒の方面のみ書いて悲しんで居ました。其上家庭は不平があつた。この不安と不平との二の空際には常に何物かに依て充たされなくて止まぬのでありました。それは丁度明治卅八年の頃計らずも求道學舎の講話に列りました。二回三回と聴聞致す中に次第に如來の大悲も喜ばる身となつて來ました。今迄重荷の如く感じた心配もなくなり。今迄惡んでいた人も自分を導く菩薩方の様に思はれ、實に飛び立つ思ひ、今殺されてしまつても少しも残りをしい事がないと云ふ大満足な思ひでした。寂しい自分の顔が何だか賑やかな顔になる様にも思はれました。唯此時は無性に嬉しく、氣の付かぬ世の人が氣の毒に思はれまして、其後日曜毎に成可く學舎の講話を聴聞して先生の御養育を次第に蒙りました。三十九年には中學も出てさあこれから専門をやらうと思ふ矢先又病魔の囚はれとなりまして、其苦悶の中に在つても如來の事

を思はぬでもないが、前途を思ふとき學問の事が心配でならぬ。病氣が早く治ほしたくてならぬ。自分の信仰は其等の心配までも他力であると喜ぶ様な強いものでない。これも如來の御導きであらうと無理に思ふ事は出来ても逆境を其儘喜ぶと云ふ事はとても出来ない。唯々病氣を治ほして勉學の道に進みたくてならぬ。それならば自分の信仰が唯自己の感情で斯く思はるゝのであるかと云へばそうではない。嚴然たる力強きあるものである。翌年はまだ全快とはゆかぬが無理にも専門學校に入學した。此頃は殆んど求道學舎へ足を向けなくなつた。それは欲するものは既に與へられたのであるから、其上求むる必要がない様に思はれたからであります。御慈悲の一點には疑問はなかつたが教義の上には望洋の嘆に堪えぬものが澤山ある。五劫思惟とは何であるか、信心不離とは何の事であるか、さつぱり分からぬ。御慈悲を賜つた以上は其以後の行爲皆佛恩報謝であつて穴勝念佛のみ佛恩報謝であるまい。眞宗は信心爲本だから信心さへあればよいのだと云ふ様な無謀な質問を、度々先輩に向けたが依然として斯かる事は解からなかつた。

昨年の暮、身體がどうも思はしからぬので斷然校を退學しました。其頃から自分の信仰が氣になり出した。どうも失なつた様だ。今迄は自分が罪のために底深く落ちてゆく時そこに大きな御手が出て落ちると云ふ事がない様な感があつた。ところが今はそれが無い。落ちればどこまでも何處までも落ちてゆく。どうしたのだらうか自分に取つては現實以上の強きそのものは何處に去つたのであらう。不審に堪えぬ。眞實の

信心は失ふ事がないと聞いて居たのにこれは如何うした事であらう。自分には過去のそれが眞實のものでないとはどうしても思へない。信心は失ふ事があるものか。丁度谷底へ落ちた感だ。茫然として落ちたるまゝ上らうと云ふ勇氣がない。上に咲く花は空華であつた。遂に其事を只一友に打明けた時、友は君はそう思ふが如來の方には見捨て玉ふ事がないと懇々話してくれられたが、心から分らないのであります。病氣は益々氣になる。希望も無き、渴仰もなき、失意の自己は唯食はんがために生きていた。其寂しき私は今年の春、三年振りにて再び學舎の門を這入つた。第一回の時は唯自己の事のみ考へていて先生の御講話は更らに耳に這入らぬ。第二、三回と續けてゆく中、自己のみ考へて苦んでいた眼が次第に如來の方に轉じて來た。その時「本願」と云ふ事がふと胸に浮んだ。噫御本願であつた。如來を後にして自分の事のみを先きとしていた。如來は先手に在しませるものを、この御本願と云ふ事が分かつてくると何だか今迄分からなかつた五劫思惟と云ふ事も、信心不離と云ふ事も、本願念佛と云ふ事迄私の心に分かつてくる。正信偈も御和讃の一々までも悉く自己の信琴に響きて下さる。如來の御本願の綱を忘れて唯私の手のみ氣にしていたる事の愚さよ。眞宗は如來が先手に在まして、私は後手でありました。念佛の外は何物を求めて居たのは私の誤りでありました。念佛は如來の御招換に應ずる私の聲でありました。又御招換の其御聲でありました。如來と私とを結びつける唯一の綱——念佛の外何物をも欲しませんでした。如來を思ひ念佛を稱ふる時は温かき慈母の懷中に抱かれ

て居る感に堪えませぬ。如何なりともあなたの心任せてあります。然しこれは如來を思ひ居る時だけの感でありまして、如來を忘れて居る時は依然たる悲しき私です。

去る二月二十四日の夜は不思議なる夢を見ました。翌日の日記に誌したところは、

『昨夜實に奇妙な夢を見た。自分が暗い本堂で祈念をこらして居ると光明赫耀たる阿彌陀三尊佛が顯はれて余に近づき玉ひ、何とも云ひ様のなき光明に包み玉ひて威徳巍巍たる御有様に余に對ひ、力ある御聲にて「助けてやる」と骨にしみ渡る如くの玉ふた。斯くある事二度であつた。どうしてこんな有難い夢を見たものか判斷に苦しむのである。何とはなしに尊い思ひに腹ふくるゝ感がある。實に不思議である。』

私は此一事が只偶然の事であるとはどうしても思へません。其の頃はまだ種々苦しみ迷ふていたときですからこの夢がどの位私に力強き感を與へ玉ふたか分りません。私は如來を忘るゝ事があつても如來は私を忘れ玉ふ事は片時もないと思ひます。種々の御方便を以て私を御救ひ下さる事を信じます。私は時に如來を去らんとする事へありますが、如來の御救の綱は逃るゝものを洩らし玉はぬと信じて居ります。私が最も有難いと思ふのは正信偈の「極重惡人唯稱佛、我亦在彼攝取中、煩惱障眼雖不見、大悲無倦常照我」和讃の「煩惱にまなこさへられて、攝取の光明見されども、大悲ものうき事なくて、つねにわが身をてらすなり」歎異鈔の「親戀におきてはた念佛して彌陀にたすけられまいらすべし」とよきひとのおほ

せをかうふりて信ずるほかに別の子細なきなり」等の御言葉であります。私は彌陀如來が萬行の中より最易行の念佛の一行を選び玉ひて罪濁の私に御興へ下さる其深き御心を頂戴して、以前の如き自己詮議は止めて、矜哀なる大慈の下に、妄念惡念の起る時を御縁として念佛を稱へたいと思ひます。終に臨んで近角先生の非常なる御恩を蒙りたる事は何とも御禮の申し上げ様がありません。(完)

無明長夜の燈炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

願力無窮にまします

罪業深重もおもからず

佛智無邊にまします

散亂法逸もすてられず

世人の如き誤解があるやうであるが、此思想は佛教の根本には本來ないので、釋尊の道を教へられた時も四種の弟子ありて出家にも男女ありて比丘となり比丘尼となり、在家のものも男女も佛の教を平等に聴いて道を邁つたのであります。故に釋尊の教は本來が平等主義で在るのです。

男女の間のみならず、印度に於ては四姓の區別と云ふものがありて、社會の階級、區劃の嚴重な間て、釋尊は悟道上からは人類平等にして四姓の區別を認めなかつた、婦人に對する思想が同様に男子と同様に悟り入ることの出来るのが、佛教本來の説であります。

一切衆生悉有佛性といふは畢竟四姓の區別なく、男女の區別なく一切衆生悉く佛陀と成り得るといふ理想を云ひ現はしたものであるといふのは、必しも眞宗からのみでなく佛教全體から云うてよいのである、處が佛教が婦人を遠ざける傾向は、畢竟修行といふ點から云ふたので、佛陀の教へに従つて出家して修行するものは妻子を捨て係累を斷たねばならぬ、そこで大蛇を見るときも女人を見る勿れと云ふやうな戒を生ずるに至つたのである、同様に女子が出家して比丘尼となつて男性を離れて修業をする事になる、其時は男子に對する考は同様である、念の爲めに一言云ふと、釋尊は十九の時妻子を捨て、道を求められたが、一度佛陀の位に達して歸られた時(釋尊の母は誕生後直に亡き人であつたので)、其養母なる伯母及妻を悉く出家せしめて同様に佛の教國に入らしめられ、修行上獨身で修行する上より婦人を捨て、實踐躬行すると云

雜 錄

眞宗と婦人

近角常觀

第一 佛教全體より見たる婦人觀

眞宗と婦人といふお尋ねの題は頗る適切であります、といふものは、ご存知の通り、佛教本來の歴史上に於ける形式から申すと、釋尊は出家して妻子を捨て、佛教を開かれたのであつて、しかも、佛陀の教團といふものも(勿論教團の中には男女ありて、所謂比丘、比丘尼である、この比丘、比丘尼いづれにせよ、何れも)獨身主義を以て修業するのが佛教の形式であります、之に反して眞宗は、その制度とは全く異つて、一般に家族的生活即家庭的に信仰を喜んでゆくのであるから、世人が現代に於て、眞宗なるものが如何なる信仰よりして此の如き形式を來したかを知り度いのは、道理な事である、隨つて頗る適切なる題であります。

廣く論ずれば如何程でも廣くなりますが、まづ佛教全體の形式と眞宗の形式とは大に形式に於て異なるやうであるが、精神に至りては矛盾のない事を一言云ふ必要があります。抑、佛教其れ自身が婦人に對して卑しき思想を持つかの如

ふ事でありませう、之が佛教全體より見たる婦人觀であります。

第二 自力戒律と婦人

此に於て、進んで佛道修行になると、例せば基督教の中世紀に於ける修道院生活の如く遁世的、苦行的となり、佛教も諸種の戒律を守り、種々の苦行を修行するやうになつたから、日本でも奈良朝末平安朝始の佛道修行といふものに、遁世氣風が多いのであります。

抑々日本に佛教が渡來してより、聖德太子は自ら攝政の地位に在し、萬機を總攬なされて、俗生活の儘で佛法を信ぜられたのであります、勿論家庭には膳手の妃といふ立派な夫人が居られて共に母君に孝養を盡し、三人信仰上より同心一體の家庭を作り、山背王を始めとして多くの御子を育て、立派な信仰を以て經世せられたのであります。

佛法が盛になりて平安朝に至りて叡山高野山等を開きて山林に佛道修行をするやうになり、僧の集る所は女人禁制になつてしまつて、社會と宗教の部分と相接觸せぬ程に遠ざかつて嚴格に婦人を遠け、竟に婦人は佛法の非器といふに至りたるのである、是畢竟戒律主義の結果である、此の此く宗教が實社會と遠かりたるもの、故社會は源平の戰の如く、事實に於て混亂し精神上に於て苦しむて居る、平民的宗教と云はれる眞宗の如き宗旨が起りて從來の戒律主義を全然打破りて、男子も女子も區別なく在家、家庭生活の儘救はるゝ様に成つた、此如く一大革新の來りたるは單に外界の便宜より來た者ではな

くして、此如き平等の救済にあづかる、信仰夫自身から来るのである、夫故進んで信仰の内容をお話ししなければならぬ。

第三 他力信仰と無戒律

抑々親鸞聖人の眞宗は、法然上人の教へを聴て開かれたものである。法然上人の教へは如何なるものか、之を簡潔に申すと、彌陀の本願といふのが、聖人の示された中心問題である、さらば彌陀の本願とは如何なるものであるかといふと、普通の從來の佛教の自力修行の方法で、例へば、戒律、座禪、智慧など諸々の行を修して佛陀に達するのが道としてある。もし我々が之を以て進んでゆき得るならば彌陀の本願は不必要なものである、多くの佛道修行者は諸々の律法主義に陥りて、實際としては實行の出来ぬ諸々の行に囚はれて苦しむて居るのである、そこで佛教中に法然上人が初めて信仰された彌陀の本願は、それらの諸々の行の及ばざる處のもの即無智、無戒、罪惡のものを主として救ふ爲めに現れたのが、此の彌陀の本願である。理解し安い様に通俗な譬喩を以て云へば、こゝに高い岸がある、之に自己の力を以て漸く攀上りて岸に達するのが、即ち遁世戒律主義で悟る自力の道である、然るに實際岸上に達する事が六ヶ敷い、若し達し得られぬならば、岸の人——即佛陀は冷然として眺めては居られない、その岸下の者を救ふ爲めに、上から綱を下ろして引上げて下さる此が他力本願である、故に綱の目的を自己の力を以て上り得るものゝ爲めてなくして、上り得ざるものゝ爲めに下された綱である、下されたる綱は、世に苦しめるものゝ爲の綱であ

る、故に法然上人の彌陀の本願を説くに當り、他の戒の守られざる者、無學の者、罪ある者、主として岸下に迷へる者の爲めに下されたる唯一の綱である、是即彌陀の本願念佛であります。

斯る教を説かれたのが法然上人で、この教を聴たものは三百八十人、熊谷直實の如く人を殺した武士も、甚しきは耳四郎の如き盜賊も、檐の下で上人の教へを聴問して法に入り、又朝廷の諸々の上卿雲客、攝政關白兼實の如きも法を聴いたのて、實に法然上人は一味平等の如來の法を説かれ、無戒無律の救済を示されたのであります。その上人の信仰を聴き、教へに従うて之を事實に實現したのが親鸞上人であります。

第四 親鸞聖人の信仰と家庭生活

の恩寵

親鸞聖人は十九歳の時求道の爲め聖德太子の磯長の廟に參詣して、信仰の動機を得られた、けれ共爾後十年間戒律座禪を以てしても、信仰の光を見出し得ないで煩悶を重ねました、二十九歳の時、京都の六角堂に參詣して、夢の靈告に由りて、法然上人に遇ひ、上に説ける彌陀の本願を聴き、從來何れの行に由つても得られざりし光明を認むる事を得、偏に法然上人の教へを信じて如來の本願に由て救はれ、専ら念佛を信するやうになられた、この信じやうが絶対の信仰である、若し他の人の弟子にすると、絶対的でない、如何なる信じ方かと云ふに念佛もするが、猶出來得べくんば座禪をなすべし、出來得べくんば戒律をなすべし、念佛の已上に何事でも善根

修行をすればする程よいのであるといふのである、例へて云ふと自分のみでは爲し得ないが、綱にすがつて上るのである、併唯々綱の力のみで救われるのでなく、善き行をする程救はれると云ふのである、さうすると絶対に本願の綱で救はれるのではなくして、自分の力を加ふればよいのである、故に戒なすべし座禪もなすべし、而して佛陀に達しやうといふ事に律も成る、親鸞聖人は然らず、我は戒律も無し得ず、座禪も爲し得ず、此の如き何れの行も及び難き我を救ふ爲の唯一の本願の綱であると絶対に信ぜられたのである、歎異鈔の一節にも斯う告白してある。

親鸞におきては、たゞ念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信ずるほかに別の仔細なきなり、念佛は、まことに淨土にうまるとたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總しても存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまゐらせて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆゑは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまをして地獄にもおちてさふらははこそすかされたてまつりてといふ後悔もさふらはは、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。彌陀の本願まことにおはしますば、釋尊の説教、虚言なるべからず、佛説まことにおはしますば、善導の御釋虚言したまふべからず。善導の御釋まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまをすむね、またもてむなしかるべからず

さふらふか。詮ずるところ、愚身が信心におきてはかくのごとし。このうへは、念佛をとりて信じたてまつらんとともまたすてんととも、面々の御はからひなりと。云々

右の一節にある如く、親鸞聖人は何れの行も及びぬものであるとの考へを以て居られた故に、座禪戒律諸々の行も無く、絶対に一箇の無戒無律の凡愚として法然上人の教の如來の本願を信じられたのであります。

此の如き信仰を得られた時再び六角堂の靈告を得られた、即ち救世菩薩が女身を示現して聖人に信仰的家庭生活を與へて、人生を莊嚴して共に樂土に生るべしとの意味である。而して六角堂は、聖德太子の建立である故に此靈告は法然上人の無戒律の救済の教化を聖德太子の形式に於て實現せしむべき動機となつた、此處で親鸞聖人が神秘的靈告に感じて斷然家庭的生活を實現し、關白兼實の女、玉日姫と結婚せられたのである、即ち如來の本願を信じたなら、如何なる生活をするも救はれる、猶適切に云へば、何れの行も及びざる處の無戒のものゝ救ふのである、といふ法然上人の教へを信じたので、(世間的活眼を以て、人世的に斷行したのでなく、)法然上人に導かれ聖德太子に導かれたのである。之を信仰的言語を以て云ひ現はすと、家庭に於ける親、夫妻子は皆同一の信仰を以て結び付けられたる光明中の生活である、必しも家庭のみならず、すべての人生生活に於ける事物は佛より我に與へたる慈光である、人生的に云へば、共に佛を信ずるといふ信を以て成立した家庭なり親子なりといふことになるのであります。此の如くして眞宗に於ける積極的に家庭に對する佛陀の恩

寵を感じる様になつたのである。

第五 眞宗より見たる婦人觀

それと尙さうなつた處で、この親鸞聖人の實行は勿論の事、兎に角法然上人の教自身が當時自力修行を主としたる叡山南都などの他の宗の見地よりは許すべからざる懸隔を生ずるので、これに對する迫害が起りて朝廷に讒訴する様になつたのである、法然上人は七十五歳土佐の國に、親鸞聖人は三十五歳の時に越後に流罪となられました。

諸迫害を受ける所以のものは畢竟無戒律の救済及び家庭の恩寵を知らざる爲めに起りたるものにして、兩聖人は此迫害及流罪を以て、此教を邊鄙の衆生に傳道すべき機會を與へられたる恩寵なりと感謝されたのである、絶對他力の慈光の實現したものは、人生に敵はない、無碍圓融である、親鸞聖人は是より越後及關東に二十年間傳道して、茲に眞宗を開闢して、家庭的信仰の形式を一般社會的平民的に實現するに至つたのである。

親鸞聖人の夫人玉日姫は後に越後へ下られたと云ふ説と、又ある説には京都に死なれたとも説があるが、矢張り越後の方で聖人を助けて傳道されたのであります。後に剃髮して惠信尼と申されたが常陸の稻田にその墓があります。

一語注意すべきは、世人普通の考には、人生の家庭生活にかゝる意味をつけて美はしく詩的に思想したものと思ひ安いのである、是は大なる誤りである、寧ろ此の如き動かすべからざる大確信の上より家庭生活を實現されたもので、佛陀の

恩寵なりと信じたる已上は、例令流刑の迫害を以てするも奪ふ可らざる確信より實現したる家庭である、即ち信を以て結び付けられたる嚴格なる一夫一婦の家庭である、當時の日本では一夫一婦は當時の問題になかつたけれども、親鸞聖人の信念からは神聖なる家庭を莊嚴すると云ふ事は疑ひないので、爲に積極的にかゝる現象せられたのである、現に親鸞聖人の信仰は彌陀一佛といふので、之を信するものは、諸々の佛菩薩を並べて信すべからず、之を信するものを難行難修というて大に嫌ふのであります、故に絶對に唯阿彌陀一佛を信するのみ、從つて人生上の事にも同様に此絶對の信仰が實現すべき善であります、故に家庭上の問題にも一夫一婦であると斷言せねばならぬ。

親鸞聖人の子に善鸞上人といふ方がありましたが、父の上人と信仰が異なつたので、親鸞聖人は遂に善鸞聖人と義絶した、これを以ても絶對的態度の一面を見る事が出来るのであります、家庭に於ける親子の關係、夫婦關係は信仰が基になつて生じて来るから、その信仰が異なると、義絶して迄戒めたのである、從つて後世子孫は必ず信仰せねばならぬと云ふ事になり、本願寺の如き血統と信仰と結び付いた組織を生じたのである、以上申したのは、親鸞聖人の婦人及家庭に對する思想であります。

第六 眞宗と婦人

次に、婦人が眞宗を如何に信すべきか、といふ問題である。之は婦人からいうても全く問題は同じである、佛教の普通の

道ならば、遁世して修行する事は出来得ざるもの、佛の本願なればこそ、男女の區別なく平等に信すべきものである。

從來、叡山にせよ、高野山にせよ、女人を禁制したのは、佛教本來から云ふのでなく、婦人が戒律の爲めに卑しめられたのであつたが、それも復活して、婦人の佛に對する道が再び明らかになりました、かく眞宗は婦人に對して平等であれば、婦人は佛陀に對して絶對の懺悔、絶對の恩寵即ち絶對の確信を與へらるるのであります。

親鸞聖人の末娘彌女（後に剃髮して覺信尼）といはれたのは、父なる聖人の滅後、京の東山に父の墓の傍に堂を結んで、そこに親鸞聖人の木像を安置した、それが本願寺の基で、又親鸞聖人の夫人は、上人が年六十になり、京に歸られても、弟子と東國に教を擴めて居られた、斯くの如く眞宗は婦人の力に上りて成立して居ります、それから前に述べた、善鸞上人の子に如信上人といふ人があつて、之が祖父の親鸞聖人の信仰を其儘受けて堅く信じたのであります。

已上眞宗の専門語を用ひた故、門外の人には理解し難いかも知れないが、碎いて云へば、絶大の佛の慈悲の下には男女の區別なく、在家出家の區別なく、善惡の區別なく總てのものが救はるゝ又士農工商の區別なく、平等に佛の恵みに救はるゝ、これを親鸞聖人が示して、此光明中に家庭生活をして、寧世俗的に働くのは佛の恩寵で、之に由て働くのは我々の感謝生活である。

近時世人の要求する信仰上の家庭生活は既に親鸞聖人の實現せられた處である、然るに近時の家庭は、信仰を本として之

から出て來たものでなく、唯家庭の圓滿を計る爲に信仰を得たいと云ふ、即ち手段としての信仰を求めて居るのである、夫故決して眞の信仰的家庭を實現し難いのである、近時世人は品格を高め、活動を助け、家庭の圓滿を計る爲に、信仰を求むる聲は盛なれども、得るもの少きは手段として信仰を求むるからである、抑、人格も活動も家庭の圓滿も自力の効でない事を知りて此の如き我を救ひ給ふ佛陀を信すれば茲に絶對の信を得てそれによつて人格も高まり、家庭も圓滿ともなるので、信によりて得たる家庭、信によりて得たる國家であつたら、餘程力のあるものとなるであらうと思ひます、眞宗の家庭を初め社會、國家に對する態度は實に是であります。

（善鸞愛國婦人）

一 吞舟の巨魚なれども、水をはなれるときは
螻蛄のためにもしたがへらる。念佛の行者もし
自力の心をあこして、本願海の水をはなれるれば、
すこしの惡にもさへられて、淨土に生ずべから
ずとなり。

一 いとけなき兒は手をひかれてたち、年老た
る人は杖にすがりてゆく、これちからのすくな
きゆへなり。

一切衆生みづから菩提のみにすゝむべきち
からなし、されば本願の他力によつて煩惱のや
まをこそ、生死のちまたをすぎゆきて涅槃のみ
やこにいるべきなり。

（眞宗要教鈔）

唯念佛

近角常觀

昔話にこの様なことを聞いたことがある。千の利休が一日豊太閣に向いていふには、此頃私の菴に朝顔の花が咲きました、どうぞ御出あつて御覧ありたいと御招待を申しした、豊太閣翌朝露を拂ふて利休が菴を言づれられた、借柴の戸を叩きて何れを眺むるも朝顔がない、彼の垣根も此軒端にも見當らぬ、不審がりつゝ菜室に通られたる所、床の間の小瓶に朝顔が唯一輪挿してあつた。豊太閣は之を見て、感嘆措く能はず、こよなく喜ばれて満足極りなかつたとのことであつた。流石は利休である。實は唯此一輪を見せるために他のありとあらゆる咲き亂れたる朝顔を刈り去りて置きたのであつた、實に趣味深き話である。

之を信仰上の譬喩に引き當てるには、少しく悠長に流れる處はあるが、如何にも場合が酷似して居るから其咎を謝しつゝ一言したいのである、夫は外ではない親鸞聖人は、法然聖人の選擇集を尊崇して、其教行信證の後序には希有最勝の華文、無上甚深の寶典也と言一句全く我が生命として感泣しつゝあるにも拘らず、教行信證中に其選擇集の文を引用したまふこと唯一ヶ所、曰く、選擇本願念佛集云南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と及三選の文是である。是實に利休が唯一輪の朝顔である。唯此一輪を生かしたいばかりに、言々々々の華文を刈り去りて置かれたのである、古來選擇集の始と終とを舉

げて全部を引用した意を示されたと解釋してあるが、そう云ふてもよからうが、何んとなく理窟に陥りて居る、たとひ全部を引用したといふとも、始と終とを擧げて中略したなどいふ様なことを言はず、南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本に、全部を包括せられたと申したい、法然聖人一代の御教化之より外に出づることはない。

歎異鈔と教行信證とは、聖人の信仰を言語と文字とにあらはされたものである。故に同意義のことが形をかへてあらはれてある、此南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本をば、歎異鈔には、親鸞におきては、唯念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうふむりて、信ずるほかに別の仔細なきなりと、仰せられたのである。

唯念佛實にこれ一輪の朝顔である、いづれの行も及びがたき身なれば地獄は一定すみかぞかし、しかるに唯念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしとよき人の仰をかうふりたのである、實に萬縁叢中紅一點である、煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、みなもて、そらごとたはごとまことあることなきに、唯念佛のみぞまことにておはします、萬里の沙漠に於ける一簇の緑地である、實に唯南無阿彌陀佛の清泉こそ、十方衆生の枯渴を醫する生命の源である。

利休が挿んだ一輪の朝顔は即ち是れ夏の朝に咲ける家々の無數の朝顔である、法然聖人の選擇本願念佛は三經七祖は勿論のこと、一代藏教か収まりてある、運如上人の所謂一切の聖教といふも、唯南無阿彌陀佛の六字を、信ぜしめんがためなりである、否釋迦一代の説教のみならず、十方恒沙の諸佛、

三世の諸の如來、出世の正しき本意は唯此南無阿彌陀佛を説かんがためである、我等一たび唯此南無阿彌陀佛を信じぬれば、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障礙することなく、天の星も南無阿彌陀佛、地の水も南無阿彌陀佛、衣の襟をたゝきても南無阿彌陀佛、疊をたゝきても南無阿彌陀佛、「阿彌陀佛といふよりほかは津の國のなにはのともあしかりぬべし」南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。(おんこ)

世の中の尼のこゝろをすてよかし女牛の角はさもあらばあれ。

我なくと法はつきまじ和歌の浦あをくさ人のあらんかぎりは。

戀ひしくは南無阿彌陀佛をとなふべし我も六字の内にこそすめ。

鳥部野をちもひやるこそ哀れなれゆかりの人のあとしちもへば。

歴めぐりて迷はんかたもなかりけりけふや寝ざめのあかつきの空。

時報

傳道日乘

○六月十九日 日曜講話及信仰談話會を開き集鴨監獄の教誨をも終へ、一家團欒晚餐を共にし、佛前に禮し、夏季傳道の途に上る、時に月正に天に沖し、晩涼洗ふか如し、乃ち逍遙して停車場に至る、妻兒亦隨ひて送る、兒頻りにお月さん何くつ、十三七つを歌ふ、上野停車場に着すれば弟人車荷物を運び、學舎一同及び同朋諸兄待ち受けらる、厚意感謝するに言なし、滿城の新緑營雨に飽くが如く、滿身大悲の恩寵に浴して出立す、汽笛一聲汽車の動き出せし時、兒は驚きの瞳を見はりぬ、唯今着せし手紙によれば遂に烟と共に見えずなりし時泣顔いたし御父チャン、イツチャッタと別れ惜しみ候様、胸にせまり候とあり、書を繙くこと數頁忽にして眠に落つ、寤めては讀み、讀みては眠る、給仕に起されて始て郡山に着するを知る、停車場に待つこと一時間餘。

○二十日 午前四時岩越線によりて若松に向ふ、窓外の緑樹鬱鬱として風色頓に幽邃雅趣言ふべからず、翁島を過ぎて昨年の會遊を想起して年光の過ぎ安さを歎せり、既に若松に着す、同地、求道會員諸氏禮服襟を正ふして迎へらる、五年の間終始一貫渝らざること一日の如し、眞に會津氣風を發揮するものと謂つべし、況んや眞實手誠の如來の廻向あるに於てをや、眞にこれ金剛堅固の信交と謂つべし、自ら願みれば一

今の野僧愚夫、何か故に此輩待を受くるや慚愧交々至る、清水屋に着す、扁額庭樹皆舊知ならざるなし、況んや家人に於てをや、同朋諸氏一年已後の消息を問ふ、人生幾多の行路嶮惡なるにも拘らず平安此の如きを得るは全く大悲願船の力たらずんばあらず、南無阿彌陀佛、同朋諸氏は予か御舊蹟に詣するの志あるを察し、會津より南の方約一里、一の堰無爲信房の墓に案内せんとて準備せらる、感謝言の出づる所を知らず乃ち、人車と自轉車とにて七人の同朋諸氏に伴はれて行く、會津城墟老杉鬱々として蔭蘿石垣を蔽ふ、夏草やつはものとも塔婆の跡、既にして一の堰墓地に着す、草路を辿りて五輪の率首和讃を誦誦し、歎異鈔の卷末を讀む、今年の初如信上人の墓に詣てし時を回想し、且無爲信房の當年奥州に傳道せられし御志、亦露命わづかに枯草の身にかゝりて候云云の如くなりしを追憶すればなり、げに文永元年聖人御入滅の翌々年近邊行乞中、卒然病を發し路傍に寂せられしといふ、行年七十九歳、生地は會津より北西六里柳津の人、晩年聖人御歸洛の後無爲信房亦古郷に歸りて教化せられし也、嗚呼今によりて初めて想ふ、噫何の宿縁ありてか年々此地に法契を得る、恐くは無爲信御房の御導あるにあらざらんや、牧草を荷める牛は之を下ろして初めて我が爲めたりしことを知りしとか、今日墓前に詣て、初めて多年の御恩を悟る、無爲信寺は此墓前の寺、轉々して遂に越後水原佐藤家に再興されしもの、一たびは二百金を村に寄附して墓をも移さんとせしも村民聴かず、今に現存すといふ。

時越後新津着、十二時新湯着の筈に候。

青山青水到處慈光照耀

六月二十四日午後二時

會津出立の時

拜啓、昨日十一時新津着無事旅行を終へ、昨日終日傳道致候。我事無事健全に候間決して御案じあるまじく候。昨日以來到處何れも大に喜び候。勿々

二十七日

新潟西堀通り六、西入寺様にて

○ 明三十日朝六時新湯發の船に乗り込み申候。新潟の傳道は非常の好運にて到處大に渴望隨實に近來の會心の事に有之候。實に御法主臺下の御待受にも相成信仰問題を發起し實に佛天の御恵み感謝の極に候。一日に少なくとも三四度づゝ講話するといふ次第に御座候。爲之葉書一葉すら書く暇無之次第に候。先日會津より新潟へ出る道中にタチハキをはきたる女兒を負ひつゝ慈むを見て

たはきはきはさつる賤の山かつも

子を思ふ誠かはらざりけり。

渡邊萬吉氏妻君病氣の有様告白を送り下され、誠に御氣の毒に御座候、今日は訪問いたし候。又今日は有名なる御開山御舊蹟鳥屋野逆竹の參詣演説大に御開山の御苦勞を追懷致候。南無阿彌陀佛

三十日朝三時半

新潟出發の朝

○ 只今海上平穩鏡の如く無事佐渡夷港に着いたし候。之より

傳聞らく、香樹院師嘗て此墓に詣て、香華料を捧げて歸らると、予無爲信寺に法縁を得ること再度、特に安置せる聖人八十九歳の自影儼として心に銘す、聖人及御房入滅の當時を追想して老軀枯槁したまへる師弟の御姿髣髴として見るが如し、勿幹なや祖師は紙衣の九十年。

午後三時求道會場に於て歎異鈔を開講す、第一席に信仰は宇宙問題倫理問題にては得られず、人生問題によりて獲得せらるゝものなるを述べ、全く彌陀の誓願不思議の御力によりて信の一念罪惡深重煩惱熾盛のわれらを攝取の光明中におさめたまふとを述べ、第二席に歎異鈔作者につきて如信上人、唯圓房兩者如何の多年の宿題初めて解決するを得たる卑見を述べ、夜會は歎異鈔と教行信證につきて一々神會冥合するの所感を述べ、歸宿すれば正に十一時、佛前小經を誦して遂に學舎の勤行を想ふ、安靜に展へられたる褥と枕とは是れ聖人か雪と石との結晶なりけり、南無阿彌陀佛。唯今東京よりの來書に御信心一つの世に御信心已外のことにつきて、かれこれおもふは恰も水上のかげ、水泡を弄せんとする小兒の如きものならんと、噫然り、唯念佛のみぞまことにておはします。

南無阿彌陀佛

○ 以後の傳道日乗は原稿未着に付、私信を以て之に代ふ

○ 拜啓會津に於ける五日間實に難有極みに御座候、全く佛天の御加護と奉存候、五日間非常の御恩寵に浴し唯今自轉車九人の御同朋に送られて越後に向ひ申すべく候。廿六日午前十

人力八里相川幅野氏方に向ふ

三十日

夷にて

○ 拜啓佐渡無事すみ、昨日臺下に三條にて御目にかゝり今日より飯山に向ふ、七八日飯山、九日増村様、十日糸魚川、十一日安塚、十二日直江津、十三日三條なり。

七月七日

信州中野にて

○ 唯今直江津に着し、昨年厄介に相成り候巨多氏の寺に蒲田君父子に迎えられ、晚餐頂戴仕候。今夜船にて糸魚川、すぐ明夜乗船亦直江津に歸り可申候。増村様の處にては皆様御丁寧になし被下、新井迄増村様御見送り被下候次第に候。到る處大悲光明中に感謝仕居候。今後の居所左の如し。

十一日

西頸城郡糸魚川

德正寺

十二日

東頸城郡安塚村

添景寺

十三日

直江津

德信寺

十四日

三條別院

十五日

大低吉田ならん或は新潟

十六日

新潟市

十七日

新發田

十八日十九日

長岡市

二十日

柏崎

二十一日

新井別院

二十二日

高田別院

二十三日

長野城山大谷派說教所

其夜出立して二十四日朝迄に到着歸京可仕候。依之二十四日講話致候間其旨雜誌に御掲載有之可く候。先は要用のみ。大深悲重の御恵み有難し。南無阿彌陀佛。到る處御恩に浴し不堪感泣候。勿々

十日

直江津にて

○ 明朝直江津にかへり申すべく候。

唯今到着候處は昨日の海濱に反して山色清淨の處に候。

十二日正午過

安塚添景寺

唯今系魚川終り再び直江津に着致候。昨年此處にて管瀬奥様の計に接し候處に候。柏原文太郎氏夫人の妹様宛手紙書き申候。今日安塚に参るも、亦明朝此處に歸來可申候。二十三日晩汽車にて必ず歸京可致候。勿々

直江津にて

其後の傳道日割

七月二十四日 求道學舎日曜講話
大磯大日本佛教青年會講習會
同二十六、七日 三河大濱西方寺
同二十八、九日 江州長濱淡水會講話
同三十日 江州故郷
同三十一日 同
八月一日 攝津東明
同二日 神戸青年會
同三日午前ヨリ五日前中 鹿兒島青年會
同七日ヨリ十三日マデ 琉球
同十四日ヨリ二十二日マデ 九州各地
同二十三ヨリ二十九日マデ 朝鮮
同三十日以下凡二十日間

夏季に於ける青年の修養

近角常觀

夏季休暇は如何にして經過し、如何にして修養するか、私の學生時代の經驗を御話しすると、一年に一度は必ず國に歸つて、両親を見舞ふのを殆ど不文の律としてゐた。夏季休暇に執る可き方法は第一に両親を見舞ふにあると思ふ。私は少年時代から庶務、周茂叔の誠を聞いて居るが、自分の書生を一年に一度は故郷に返し、必ず両親を見舞はしめたと云ふ事である。又頼山陽は晩年母を奉じて諸國を遍歴すると云ふ事も聞いて、其れを殆ど理想的に考へてゐた。そして二十を過ぐるまで斯くして夏季休暇を過したのである。

私の故郷は琵琶湖の畔、竹生島を對岸に望む景色のよい田舎で、何時も其處に歸つて心身を養ひ、時には賤ヶ嶽に登攀する事もあつた。只自ら想ふて慚愧に堪えないのは、國に歸る時には澤山の書物を携帶しながら、ついぞ其れを縊かずして終るやうな事があつた、然し私は無理をして學問したのであるから、老ひたる父母の質素なる生活をなし、田舎の人が頭に汗して立働いてゐるのを見ては、私に取つて何れだけの利益であつたか知れない。今から振り返つて考へて見ると、一種云ふ可からざる詩情を惹起す。永い休暇を親のもとに送り、辭する時は老ひたる親に送られ、老ひたる親の健康を氣

遣ひ、他日親を奉じて遍歴しやうと云ふ山陽の意を學んで、何十年かの後には両親を供ふて旅立したいと思ふのは、まだ考へて定まらない青年に取つて、誠に嚴肅なる感を心の奥底に與へる。若し休暇に妙な旅行などをなし、或は都會で遊惰な生活をするよりも、殆ど何もしないでもよいから、丁年前後のものは故郷に歸つたがよいと思ふ。

私が高等學校に入學してからは一つの變化が起つた。私共友人相俵つて佛教夏季講習會と云ふものを企てたが、其の頃日本にはまだ夏季講習會なるものは絶無で、只西洋に於けるサンマースクールのある事を知つてゐただけであつたが、東京西京の青年が相聯合して攝州西須磨に其の會を開いた。其頃の須磨は今とは大に趣を異にしてゐて、西洋館などは殆どない、只田舎家に泊り込んで二週間の間講義を聴いてゐた。其後は毎年休暇には講習會を企て、鎌倉、二見、蒲郡、三浦崎、濱名湖畔、松島と云ふやうに、常に景色のよい處を選んで二週間を楽しく暮した。斯く休暇には故郷に歸ると云ふ外に、佛教夏季講習會に出席するといふ事を、一種宗教的義務であるかの如く考へた。今から思ふと誠に善い影響を私に與へて、殆ど感謝の涙を以て迎える程である。

諸君にして斯う云ふ事を聞かれたならば、愉快な事であると云ふ風に思はれて、或は此の方法を執られる方があるかも知らぬ。それは誠に結構のことではあるが、私が信實信仰の境涯に入り、安心問題の解決を得たのは、其う云ふ企てをしてから七年の後であつた。換言すれば永い間斯様の事をしてゐれば、一面人間の修養の爲めにもなり、一面心身の爲めに

もなるけれども、眞の安心問題の決着をつけるには、仲々理想的では充分に行くものではない。茲に云ふのは少し話が大仰のやうであるが、私の信仰の經路を順序から申すと、濱名湖畔の講習會から松島の講習會に至るまで、約一年間は非常な煩悶に陥り、殊に松島の講習會には殆ど煩悶の極に達して、天下の絶美も私には何等の感を與へず、佛教の講話も私には何等の光を與へない。煩悶を懷いて行き煩悶を懷いて歸つた。暫くは殆ど奮闘の力もなかつたが、其の九月から漸く信仰の心が起り、翌年の尾張に於ける講習會には非常な安心を得て、に入り全く新たな考を以て其れに出席した。夏季の修養と云ふも、斯く一種の方法を以て夏を暮したとて、それで人生の大問題の解決が着くものではない。然し其れに依つて信仰に入る筋道を捕へ得るとは云れる。

佛教に夏安居と云ふものがある。釋尊が夏は一定の場所に集まつて修行すると定められたのを云ふ。印度は御承知の如く雨期と云ふものがあつて、夏は草が茂り虫なども出て、道を歩くのも仲々に困難であるから、其時子弟達を集められて修業をされた。恰も今の夏季講習會と同じやうなもので、講習會は印度の古聖に則つて誠によいことと思ふ。然し單に其れだけの事を以てして、人生の大問題を解決し得ると思ふは間違である。斯う云ふ方法を以て信仰の道行とするならばよい。私も信仰に導かれたと云ふ効力はあるから、或は團體的に或は個人的に、信仰の書を読みながら其う云ふ方に心懸けるのはよい。

私が信仰を得てから後の夏季講習會は、人々に話をする講

習會となつて、毎年出席して得たる信仰を人々に話して居る。西洋に行つてゐる間は會には缺けたが、西洋に行つてゐる間に感じたことは、西洋人が夏季深山などを涉越する習慣がある。そして富豪は勿論左まで富裕ならざるものまでが、非常な元氣を以て大仕掛に旅行して居る。それで何か目的があつて行くのかと云ふと何もない、一つの山を越えれば又次の山を越える。男女を通じて行はれる。自分も旅行は好きだから少々歩いたが、歸つてからも休暇には年々各地を傳道してゐるから、尾張から中仙道を通つて信州に出たり、越中から甲斐信濃の方にしたり、成る可く汽車のない處を旅行した。今年も越後から佐渡の方に旅行しやうと思つて居る。又更に鹿兒島琉球から韓國までも傳道旁旅行しやうと思つて居る。從來木曾山中などのやうな處を旅行してゐると、途中に出遭ふのは大抵西洋人である。學生などと時に出遭ふ事もないではないが、日本の紳士が其處山中に旅行してゐるのに合ふ事は殆どない。日本人は夏季休暇と云へば、温泉とか海水浴とかに行くのが普通であるが、同じ山水の勝を探るにも、熱海などに行くよりも木曾山中などに行くがよいと思ふ。

以上は自分を中心とした話で、他の人が聞くと一向趣味がないけれども、經驗を認ると云ふ事は、一面諸君の年齢の時期に於て取る可き注意となるであらう。尚ほ以上を概括して話すと、丁年前後は須らく故郷に歸り、父母のもとに心身を養ふが最善の方法である。

尚ほ一言して置きたいことは、貴君(記者)の御出しになつた冥想と云ふ事はよくない。冥想は青年をして邪路に陥らし

める。信仰は人生の光なき時に大なる光に輝かれてこそ安心に着くなれ、哲學的に物を考査するのであつては、到底精神上の解決は着くものでない。却つて人をして迷はしめるものである。寧ろ空想的冥想に耽ることを止めて、信仰に入つた古人の書を熱讀玩味するがよからうと思ふ。今の修養書なるものは餘り利益のあるものではない。それ／＼各自の緣故ある古の人の書を讀むがよい。それで自分定めて遣るよりも、各々自分の信ずる人について道筋を導いて貰ふ事が必要である。然し彼の人につき又此の人につきと云ふ風ではならぬ。又人について遣ると云つた處で、安心は人間が與へるのではない。絶對から與へられるのであるから、其處をよく汲別けて置かなければならぬ。(成功)

求道學舎日曜講話七月二十四日日曜
に限り一回開會仕り候在京御同朋の
御來集を冀ひ候也

故清澤滿之師序 近角常觀著

訂正
増補

信仰之餘瀝

第拾壹版

定價卅錢
郵稅四金
袖珍美本

本書は著者が十餘年前端なくも苦悶の暗黒界に彷徨して、憂惱其極に達し、最後に佛陀靈活の慈光に浴して半歳の迷雲一時に消散したる時、自ら其心的經過を跡づけて、懺悔感謝の至情を表白したるもの、文字に些の修飾を加へず、ひたすら内心實感の披瀝に努むれたるは既に諸君の知了せらるゝ處なり。而して幸に發行以來江湖同朋の愛讀一日も絶ゆる事なく、今や其の十一版を出すに及び、本書を縁として入信せられたる諸君の多數なるは吾人の私に感謝措く能はざる所、而して先きに第十版を出すに際し根本より版を改め、誤植訂正は勿論、新に増補する處六篇あり。猶ほ最後に著者が爾後の信仰經過を告白して、附録として『予が信仰的實驗』なる一篇を加へぬ。蓋し著者が信仰の根底は本書に於て明かならん

第二版

信仰之餘瀝要略

定價五錢
郵稅二錢
部數に
應し充
分割引
(但し四冊迄は
郵稅二錢也)

本書は某師の勸誘により、有志諸君が傳道求道の資に供せんが爲に『信仰之餘瀝』中の眼目「宗教的同朋」「活ける懺悔」「信界に於ける監獄」以下二章を抜萃し、傳道用小施本として印刷したるものなり。傳道に志し給ふ諸君の御試用を切望す。

右久しく品切の處今回出來仕候也

發行所 求道學舎 東京市本郷區森川一丁目六番地 發行所

親鸞聖人の信仰

第二版

定價七拾錢
小句料八錢
クロース綴

本書は嘗て本誌に連載せる「眞宗慶應」に大訂正を加へて一書に纏めたるものなり。絶對他力信仰の大權化たる親鸞聖人一代の教證に對し、著者が平生抱懷せる渴仰、尊崇、憧憬の至情は本書に溢れて餘蘊無し。

人生と信仰

第三版

定價卅錢
郵稅四錢
珍袖美本

●第一章 人生問題と信仰 ●第二章 悲觀思想と信仰 ●第三章 倫理力行と信仰 ●第四章 犯罪心理と信仰
●第五章 社會問題と信仰 ●第六章 國家秩序と信仰 ●第七章 世界宇宙と信仰 ●第八章 諸子の需要益々急切なるため、再び本書内容は目次示すが如し。先年「求道」秋季號として發行したるもの近時、四方同胞諸子の需要益々急切なるため、再び此の解決に志ある諸君の一讀を冀ふ。

懺悔錄 附録「歎異鈔」

第六版

定價・廿錢
郵稅貳錢
珍袖美本

本書は著者が實験の信味に基づき、古來求道者の金料玉條たる「歎異鈔」の眞髓、惡人救済の眞意義を闡明せんが爲に編述したるものに著者は先づ自己の経験に筆を起し、半歳以上胸中に鬱積して寸時も止まざりし煩悶の實狀と最後、佛陀攝取の慈光に接して人生の黒闇頓に一掃せざる感謝の實感とを最も眞率精細に告白し、更に進みて之を王舎城の悲劇に照し、又著者が實験を聞きて獄中大安慰を得給へる某氏の實例に見、人間何人とも如來慈光の下唯一救済の道ある所以を可憐懇切に詳述したり。蓋し之れ「懺悔錄」の名ある所以にして一讀入信の人少なからず。

前田博士題字

泉文學士叙傳

よろこびの跡

近角常觀序 故管瀨夫人日誌

紙數二頁
定價廿錢
郵稅二錢
引割上以部十

本書は昨年求道第九、十兩號に亘り告白欄に其の一部を掲載せる故管瀨夫人の日記を輯録し紀念の爲め出版せるものなり。夫人の日記が餘るなく偽るなく、信仰より來る日常生活其儘の告白なる事は既に本誌讀者の知了せらるゝ處、今や更に次版なる道友諸君の一讀を勸告す。

施本用小冊子

近角常觀校訂

(部數に應じ充分割引す)

冠頭 歎異鈔

第四版

定價五錢 郵稅四冊迄二錢

此の「歎異鈔」は讀み易きよう字をまばらに植え、校正を嚴密になし、且つ冠頭を加へて諸聖教中より参照すべき要文を引用し、可憐懇切に作りたるものなり。

近角常觀校訂

(部數に應じ充分割引す)

冠頭 唯信鈔文意鈔

新版

定價七錢 郵稅三冊迄貳錢

「唯信鈔」は親鸞聖人の法契聖覺法印の述作にして、「唯信鈔文意」は聖人特に本鈔を尊重して、其文意を講授し給へるものなり。聖人に文意の作あるに見ても本鈔の他力信仰上如何に貴重の聖典たるかは知るに足らん。本所今此の兩書を一冊にまとめて刊行す。冠頭を加へて参照用文を引用したる等凡て歎異鈔に同じ。同朋諸君の精讀を勸む。

發行所

東京市本郷區森川町一六六番

求道發行所

規定

本誌は毎月一回十五日發行とす
本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
本誌の代金は可成振替貯金口座にて御送金の事、郵便爲替にて御送金の節は爲替振込局は必ず「本郷森川町郵便局」宛の事
郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
凡て送金受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし
本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所を通知する事
回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
本誌定價左の如し

一部 一ヶ月 一六ヶ月 一年
金拾錢 金拾錢 金六拾錢 金壹圓拾錢 郵稅一冊
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

明治四十三年六月十五日印刷
明治四十三年六月十五日發行

發行所

發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 白土幸力
東京市本郷區森川町一番地
求道發行所
(振替口座東京一六六六番)

大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京堂

所行發道求 地番一町川森區郷本市京東 番六九六六一京東座口替振 所込申

前號要目

求道

◎善もほしからず惡もおそれなし

自督

◎前念命終後念即生

講話

◎一向專修

聖傳

近角常觀

◎デヤークカ釋尊傳

久遠劫の昔

告白

◎大悲無倦

雜錄

向坊久五郎

◎如來は慈父母也

時報

近角常觀

◎自督餘錄